CONTENTS

DESIGN / 5GAS DESIGN STUDIO

CONTENTS

CHARACTERS
伊藤真二
ITO,Shinji
香月 華
KAZUKI,Hana
有村雛絵
ARIMURA,Hinae
尾上世莉架
ONOE,Serika
来栖乃々
KURUSU,Nono
宮代拓留
MIYASHIRO,Takuru

CHARACTERS
情弱の記録
佐久間学
SAKUMA,Manabu
神成岳志
SHINJO,Takeshi
川原雅司
KAWAHARA,Masashi
久野里澪
KUNOSATO,Mio
ゲンさん
GENSAN
山添うき
YAMAZOE,Uki
橘 結人
TACHIBANA,Yuto
橘 結衣
TACHIBANA,Yui
CHARACTERS

DESIGN
5GAS DESIGN STUDIO

プロローグ

――11月3日――

窓から見える渋谷の空は、黒く染まっていた。星すら見えない、どんよりとした夜空だ。

今から六年前、渋谷は突如起こった局地的震災により、壊滅的な被害を受けた。通称、渋谷地震と呼ばれたあの地震の直後の空は、こんなふうに重く暗く見えていた。

震災にて壊滅した渋谷は急ピッチで復興が進められ、今ではもう多少の傷跡を遺すのみとなっている。そんな復興のシンボルとされ、震災の被害者となった子供たちのために作られた、中高一貫の新設校、碧朋学園。高校三年生が最上級生であり、OBすらいない若き学校。私は、そんな学校の生徒会長で、新聞部の副部長を務めている。

誰もいない祝日の校舎。碧朋学園新聞部の部室に私はいた。部長も部員も、私以外誰もいない部室は、とても広く見える。思えば私がこの部屋にいたとき、たいてい別の誰かが、気を許せる仲間たちがいた。

初めは、二人しかいない広い部屋だったのに――

「こんないい部屋、もらっちゃっていいのかな？」

「もらうんじゃなくて、借りるのよ。いい、拓留？　私たちは、あくまで新聞部。高校の一部活なんですからね。ちゃんと節度を守って、行動するように」
「……部長に説教するなよな。副部長」
「今の説教は姉として、大事な、とっても大事な弟にしたものよ」
「ゴメン、乃々。調子に乗った僕が悪かったから、大事を二回も繰り返さないでくれ」

初めて二人だけで、この部屋に足を踏み入れたときのことを思い出す。
新聞部部長、宮代拓留。彼は私の大切な……家族で、弟だ。
父母どころか、苗字すら違う弟。歳だっておんなじ、ただ私のほうが、若干誕生日が早い。だから、姉だ。私たちは二人とも、震災で両親を失い児童保護施設の青葉寮に引き取られ、そのまま新たな家族となった。
青葉寮の母体であり併設する青葉医院の院長である父さん、佐久間亘。病院と言っても、小さな町医者で、父さんも豪放磊落を地で行くような、気のいいオヤジさんと言った感じだ。
子どもは、上から長女の来栖乃々に次男の宮代拓留、私たちと同じ震災孤児として青葉寮に引き取られた、次女の橘　結衣に次男の橘結人。結衣と結人は実の姉弟だが、それ以外には血の繋がりが無い家族。私たちは、時折互いの距離感に悩みつつ、復興後も家族として一緒に暮らしていた。

新しく、新聞部を作りたいんだ。
同じ碧朋学園に通っていて、当時もう生徒会にも所属していた私は、快く拓留に協力した。ひとまず設立した、最低人数の部活。顧問も身近な人、生徒会の顧問であった和久井（わくい）先生だ。のらりくらり、暖簾（のれん）に腕押しそのものの人だが、頼み込んだところ、なんとか新聞部の顧問も請け負ってくれた。
「え？　僕、新聞部の顧問だったのかい？　前向きに善処するとは言ったけど、うんと言ったつもりは無かったんだけどなあ」
生徒会の定例会、新聞部設立を議題とした席でこう言い出したときだけは、暖簾を押すのではなく引き千切りたくなったけど。
役付しかいない、二人だけの新聞部。新たな部員がやってきたのは、設立からすぐのことだった。
コンコンと部室のドアがノックされる。お茶の用意をしようとしていた私が出るより先に、ドアが向こうから開けられた。
「すいません、ココって新聞部ッスよね？」
入って来たのは、見覚えのない男子生徒だ。矢面に立ってしまった拓留が、おどおどとした様子で応対する。
「あ。はい……そ、そうですけど？　あなたは……？」

「ん？　ああ。入部希望者。名前は、伊藤真二。俺、ちょっとそっちのほうに興味があってね。ここ、新入部員募集してるん……だよな？」

「だ、大丈夫です。募集、してます……」

「なんつーかさ、随分とハッキリしてないなあ、オイ。本当にここ新聞部なのかよ……このノリで、ジャーナリズムできるのかよ……」

　怯えたようにも見える拓留の様子は、彼のやる気を削ぐのに十分なものがあった、

　身内には多弁なものの、それ以外の人には人見知り極まりない拓留。部員志望者としてやってきた伊藤くんとのやり取りも、傍から見ていて不安すぎるものだった。

でも、このあと、間を置かずに、拓留と伊藤くんは打ち解けた。趣味嗜好が似通っていたのもあったし、伊藤くんのあけすけさは、拓留の籠もりがちな心とも相性が良かった。

　結果的に、親友と呼んでいいほどの間柄になった拓留と伊藤くん。そして私が今でも親友と思っている子も、新聞部設立後の４月、入学していの一番でやってきた。

　彼女はしげしげと、部室の中を物珍しげに見回していた。そんな彼女を、拓留が訝しげに見ている。

「へー、ここが新聞部かー」

「いやお前、そんな初めて来たみたいに。今まで何回も、しれっと来てただろ」

「違うよ。今まではお客さん、でも今日からは、ちゃんとした部員としてだから。しんきいってん？　ってやつだね」

心機一転ならば、ハッキリとさせておかなければいけないことがある。私は一枚の書類にペンを添え、机の前においた。

「世莉架。入部申請の必要な所は全部こっちで書いておいたから、名前だけお願いね」

「ありがと、のんちゃん」

ぷひゅーぷひゅーと、間抜けな音が出るゲロカエルんのストラップをいじりながら、彼女はペンを手にする。こうしてストラップをいじるのは、彼女の無意識な癖だ。

「手際いいなあ、オイ!?　あと、ゲロカエルん、鬱陶しいな！」

「自分で私にプレゼントしてくれたものを鬱陶しいって、ムジュンだよ、ムジュン！　異議あり！」

拓留が叫んでいるうちに、彼女の入部手続きは終わっていた。

震災よりずっと前から、拓留と共にあった少女、尾上世莉架。青葉寮に、正確には青葉医院に来た当初、拓留は震災の後遺症により、意識のないままだった。目を覚ましても、知らぬ人間ばかりの状態。しかも、身体も満足に動かない。リハビリ、通学にも、随分な時間がかかった。

そんな拓留の不安を払拭してくれたのが、幼馴染みである世莉架だった。青葉寮にも足繁く通い、私たち家族とも顔見知りになっている。人懐っこく、可愛らしい世莉架。私はすぐに、世莉架を好きになって

しまった。
拓留も自分より一歳年下である世莉架の進学、そして入部を待ち望んでいただろうが、当時の私も、親友である世莉架の入部を待ち望んでいた。
伊藤くんのように新聞部の活動に興味があったわけでもなく、世莉架のように前々からの知り合いだったわけでもない。そんな五人目の部員は、世莉架の入部より一年後、私と拓留が三年生となった春、唐突に現れた。

私が遅れて部室に到着すると、部室隅のパソコンを前に、世莉架と拓留が戸惑っていた。正確には、我が物顔でパソコンを使っている部外者に戸惑っている。
「ねえ、のんちゃん。あの子、知り合い？」
「……うん。知り合い。この間、部活に入ってないなら新聞部においでって誘ったけど」
楽しそうにマウスをクリックするこの新入生に、私は見覚えがあった。
「いやいや。新聞部の活動って、情報を発信することだからな！　アイツ、いつの間にか部室のPCで、ずーっと、ネトゲやってんだけど⁉　てか、いつの間にエンスー2が楽しめる環境、整えてるんだよ⁉」
戸惑いつつも、苛立つ拓留。そんな拓留の怒りに気づいたのか、彼女は唐突に拓留のほうを振り向くと、
「んーん――――ん？」

食べる？　とばかりに、ロリポップと呼ばれる棒付きキャンディを差し出してきた。
新一年生の香月華（かづきはな）。なぜか言葉を話さず、「んー」としか口にしない、世莉架とは違った意味でマイペースな娘。初めて彼女が部室に訪れた日より、新聞部の片隅にあるパソコンの前が、彼女の定位置となった。
彼女はそこで、ずっとエンスー2と言うネットゲームをプレイしている。ゲームのし過ぎは目に悪い。大きな眼鏡（めがね）を曇らせゲームに熱中している香月を見ていると、そんな親の小言みたいなことが浮かんでくる

　勝手に居座ってゲームをしているだけに見える香月だが、一応新聞部としての活動も、気が向いたら手伝ってくれるし、私や拓留には懐いてくれているような……気もする。香月も、れっきとした新聞部員だ。

　香月の入部により、五人体制となった碧朋学園新聞部。新聞部としての活動は、私にとって、とても楽しいものだった。だってこうして、部室を見回すだけで、この部屋であったことがこうしてありありと思い出せるのだから。

　青葉寮もそうだ。リビングや自室を見回すだけで、お酒がやめられない父さんにお小言をぶつけたことや、結衣や結人とバーゲンセールのチラシを比較し合ったこと、お風呂で拓留とばったり鉢合わせたこと、沢山の思い出が、蘇（よみがえ）ってくる。

　でももう、そんなかけがえのない日々は帰って来ない。

渋谷を舞台とした、連続猟奇殺人事件〝ニュージェネレーションの狂気の再来〟。

自分たちの住む街で繰り広げられているとはいえ、拓留も私も他人事のように思っていた。そしてその結果、私たちは大事な人を失った。新聞部にも青葉寮にも、彼らはもう、帰って来られない。

そして今、私が待っているのも、明確な〝死〟であった。数時間後私は、死ぬか殺すか、どちらかの道を選ぶ運命にある——

第一章　こっち見んながずっと見てくる

確か、香月が入部したのと同時期だったと思う。
拓留が、青葉寮を出て行ってしまったのは。
原因は、私たち家族がついていた嘘だった。
元は他人同士だった私たちが、家族となるために必要とした、複数の約束。その中の一つである〝家族の間で、嘘や隠し事は無し〟。拓留や私も、ちゃんと約束を守ろうとしていた。でもそれでも、言えないことがあった。そしてある日、拓留は隠されていた真実に、気づいてしまった。家族がみんな、示し合わせてウソをついていたことを。
――貴方のことを思って。
そんな言葉も、拓留には言い訳にしか聞こえなかったんだろう。家を飛び出した拓留は、震災後にホームレスのメッカとなった、宮下公園のトレーラーハウスに住み着いてしまった。
私や結衣や結人は気が気でなかったが、細かいことを気にしないタイプの父さんは、平然としていた。
「気が済んだら戻ってくるさ。それにアイツぁ真面目っつうか気が小さいから、学校にもきっと来るぜ」

父さんの予想は当たっていた。拓留は、トレーラーハウスから学校に通いはじめた。一見、何の変わりもなく、私を無視するなんてことも無かった。現に学校で再会したときも、気まずそうではあったが、挨拶はしてくれた。

ただ「……おはよう、来栖」だった。

乃々ではなく来栖。呼び方が、名前から苗字に変わっていた。最初こう呼ばれたとき、目眩がした。呼び方一つで、今まで積み上げたものが崩れたような。家族としての絆が薄れていく感覚が、呼ばれる度に身を蝕んでいく。

まるで絆が薄れた反動のように、拓留は危険な事件の取材に没頭するようになっていく。拓留は、普通であることが嫌いだった。人と違う、特別でありたい。私たち家族から離れたことで、拓留のタガは外れていた。

特別でなくてもいい。危険なことに関わって欲しくない。そんな本音をぶつけようとする度に「来栖」と呼ぶ拓留の声が胸に響く。これ以上、遠くなることが、繋がりが無くなることが、怖くて仕方なかった。

踏み込めない。ただ、当たり前のように「帰ってきなさい」「みんな心配しているのよ?」と当り障りのないことしか言えない。

今となれば、このとき踏み込んでいたら、私が嫌われるだけで済んだのかもしれない。

新聞部の壁一面を占めるボード。ボードに貼り付けられた大きな地図には、ニュージェネレーションの狂気の再来の推理や情報が付箋で沢山貼り付けられている。この地図を貼りつけるところから、拓留は

ニュージェネの再来に、自ら足を踏み入れることになった。
現時点で起こっている六件の猟奇殺人事件の総称、ニュージェネレーションの狂気の再来。再来と呼ばれるだけあって、この総称には元ネタがある。
六年前の渋谷で起こった、不可解な連続猟奇事件、総称ニュージェネレーションの狂気。ボードの地図には、このニュージェネの狂気の現場写真や、関連情報も貼り付けられていた。

高校生五人が一斉にビルより飛び降りた『集団ダイブ』
胃に胎児を埋め込まれた被害者男性『妊娠男』
被害者が十字架状の杭で磔になっていた『張り付け』
体内の血を抜き取られ、死体写真をオークションにかけられた『ヴァンパイ屋』
脳を切り取られ、一週間以上生かされていた『ノータリン』
自らの腕を喰わされ、窒息死していた『美味い手』
三人の男性の身体を、分割しバラバラに組み合わせた『DQNパズル』
まるで、狂気を競い合っているような事件ばかり。思い出すだけで、嫌になる。

これらの事件は、結局きちんと解決されないまま終わってしまった。当時から、あまりの酷さに報道規制がかかっていたうえ、最後に起こったDQNパズル事件の直後、渋谷は大震災に見まわれ、それどころではなくなってしまったのだ。

私だって、あの日を境に、人生が変わった。

復興の波の中、風化していく事件。猟奇性も不可思議さも、震災により多くの人が体験した、つらさや痛みといった現実の中に埋没していった。

そうして、六年間埋もれていたものが、再び浮き上がってくるだなんて。

9月7日……この日付に意味があるとわかるのは、まだ先のことである。それにおそらく、まだこの日の時点では誰も、これがはじまりだとすらとわかっていなかった。

ニュージェネの再来。新たなる一連の事件は、一人の男の公開自殺としか思えない出来事からはじまった。

■

――9月7日――

震災以前。この俺、大谷悠馬（おおたにゆうま）が確か高校生ぐらいか。法事で来た顔も知らない親戚さまに、俺についてウチの両親が言われていたことが、どうにも忘れられない。

「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！」

決してこの言葉がトラウマになっているわけじゃない。そりゃあ確かに、そのときは親戚の言葉に憮然（ぶぜん）としていたし、自分の将来を悲観してもいたさ。言われた親は、何も言い返さなかった。その代わり、その後は俺をいない者として扱うようになった。

でもいまは、俺の口からハッキリ言い返せる。

放って置かれた結果、こんなに立派になりましたよ、と。

ただ実家でダラダラ生きて、当たり前のように大学には落っこちて、家から追い出されて。結果、俺は、参考書の一ページもめくらない浪人生になった。そりゃあわかってたよ。俺の将来、お先真っ暗なんだろうなと。

いっそ将来の絶望を先に見せてくれって願ってたね。そうすれば、首を括（くく）る覚悟も、簡単にできるってもんだ。

その反面、きっとどうにかなるという根拠のない思い込みもあった。ある日突然覚醒（かくせい）して、この人生は変わるんじゃないかと。

結果的に、覚醒したわけですけど。将来にあるのは、絶望でなく希望だったワケ。

俺がニコニヤ動画の生主（なまぬし）として成功している理由は、ネットを観る側だったときのことを覚えているからだ。秘訣を言っちゃうと、イラっとくるヤツ、ムカつくヤツの真似（まね）をしないってコト。

たとえば、俺は本当はホニャララって大企業に務めてて一とか、あの有名人のダレダレと親友だとか、親の遺産数十億で暮らしているとか、こういった、俺は優れた者ですよ一なんてアピールは良くない。本当か嘘かは関係ない。こんなこと言っても自分の名誉欲が満たされるだけで、ヒット数や閲覧数は上がらない。

だから俺は、貧しさを演出している。貧しい人間が、必死こいてこんなことに全力をつぎ込んでますよ～、と。

いかにも苦労して、普通の暮らしを成り立たせている貧乏人の生放送。

この構図のほうが、ウケはいいのだ。

それに、どうしようもない人間を見下したくてしょうがない視聴者さまは、確実に存在する。聖人だろうがクズだろうが、カウント1であることは変わらない。ただあんまりクズばかり増えると、荒れまくって困るんだけどね。

見下されることに腹が立つかどうか。そりゃあ、立つけど、お互いさまだから仕方ない。

俺だってソイツらを見下している。生主として集まっている注目と、それなりに入ってくる金。ネット上で俺を見下してくる大抵の連中よりは、いい生活している。

才能がない連中は、何も持ってないんだから、どっか隅っこに挟まって、口だけ開けて雨と埃だけ食って、かろうじて生きてろっての。

もう一つの秘訣は、あまり人付き合いをしないことだろう。コレは非常に大事。発信者である俺、観る側である多数。生主によっては、リスナーとの付き合い命！　てなヤツもいるけど、俺はしっかりと壁を作る派だ。生主じゃないけど、ニコニヤ記者の渡部なんか、モロに前者。アレはアレで、キャラを演じ続けていて、哀れだけどな。

なんで他人との距離を取るかと言えば、ネット社会で価値を生むのは情報だからだ。そして情報は秘匿性が高ければ高いほどいい。つまり、人気者の個人情報なんかは、価値があるってことになる。

そして、生主として視聴者数五千人越えが見えている俺は、人気者の域に入りつつあるといえる。@ちゃんねるの、俺の生放送『俺氏、未来が見えてしまう件について』の関連スレなんかは、いっつも盛り上がっている。俺のファンやアンチが、毎日ああでもないこうでもないと喧嘩中。

@ちゃんねるは便所の落書きと言われるだけあって、信ぴょう性がないナマの意見が飛び交っている。毎日じゃないが、俺もたまに見ている。上から目線で、ニヤニヤしながらな。

つまり視聴者とは、つかず離れずの付き合いをしていくのがベストだ。

生放送で顔は晒しているものの、ここ数カ月、人と直接会ってはいない。密林の荷物を持ってきた配達員や、スーパーの店員ぐらいか？　仕事の相手だって、ネット越しでの付き合いだ。

とにかく、人との付き合いなんて、まずいらない。俺は独りで道を切り開いて来た。この果てしない坂を、誰にも頼らず登っていくのだ――

――って、思わず格好を付けてみたが。実は違う。俺にだって、実は大事な人がいる。家族なんてくだらないもんじゃなく、恩人、親友、なんと言えばいいのか……まあとにかく、気を許せる相手だ。
そもそも、こいつらが俺に、人気サイトの広告スペースを取り扱っている代理店を紹介してくれたから、いまの生活があるのだ。やはり人間、それぐらいの付き合いはないとダメだな。
『大谷さん、大丈夫ですか？』
『疲れが溜まってるんじゃないですか？　最近、お忙しいでしょう。あまり無理しないほうが』
馴染(なじ)みのある優しげな声が、さっき唐突に襲ってきた激しい頭痛を癒(いや)してくれる。ああこれだけでも、こいつらと付き合いがあって良かった。この優しさや親しみから離れて、二カ月も我慢できたのは、奇跡だ。
久々の再会、心地よいやり取りが、俺の心を一層落ち着かせてくれる。
いまは生放送中、カメラの前に戻るから、少し待っていてくれ。
切り分けた演出用のチーズを皿に盛り、ＰＣ前に着席した。
俺の眼は未来を見ているんだ。そして自ら、切り開いていく。
このまま、こいつらと一緒に、どこまで行けるのか自分の可能性を確かめてみたい。
それが、偽りない俺の本音だ。

■

ーー11月3日ーー

ネット上で公開された大谷悠馬の死は、元の映像が出回り削除されたものの、コピーされたものがまたさらに出回って、ネット上に氾濫していた。眼、鼻、口、顔の穴という穴から、血や涙やヨダレが混じった赤い液体を垂れ流して人が死んでいく映像。趣味の悪さ、ここに極まれりといった映像だ。

9月7日午後11時。大谷悠馬によるニコニヤ生放送『俺氏、未来が見えてしまう件について』の生放送開始直後。リスナーからのリクエストを待っている間、大谷悠馬はカメラの前から離席。予定の時間を大幅に過ぎた後、にこやかに画面に戻って来た彼はーー

右腕を失っていた。

その右腕は、彼が左手で持つ皿の上で、輪切りにされていた。

「もーしわけない！　この安売りしていたチーズがあり得ないくらい固くて」

そう言いつつ、切断された血塗れの自分の右指を口に含み、美味しそうに咀嚼した。まるで、本当にチーズを食べているかのように……。死亡したのは、その直後のことだった。

急に正気に戻り、しかし目の前で起こっていることを理解できぬまま痛みに苦しみ、いろいろ垂れ流しつつ、口の中の親指を吐き出した後、机上にて死亡した。幸せな魔法が突如解けた……そんな急転直下の死に方だった。

この怪事件に名付けられた俗称は、『こっちみんな』。

カメラ目線で死んだ姿からそう言われているのだろうと思ってた。でも本当はウェブ上で『こっちみんな』と呼ばれるアスキーアートに似ていることからそう命名されたらしい。

この事件は、動画の閲覧数や拡散数が物語るように、すでにいろいろな人たちが議論や推理を重ねている。

事件当時、現場に第三者がいた。この事実は映像から判明していたが、その正体は未だ謎のままとされている。

しかし不思議なのは、本当にこの人が未来を見る力も持っていたのなら、自分がこんなにひどい死に方をするのが、なぜわからなかったのかということだ？　これまで、ニコニヤ生放送の番組中、本当に未来が見えていたとしか思えないことが幾度もあったらしい。番組の人気もかなりのモノだったらしく、それも頷（うなず）ける。

そしてふと気づいた。彼は、自らの未来を信じられなかったのかもしれないと。もしくは直視する覚悟ができなかった。本当に未来がわかるのだとしたら、本物の覚悟が必要になる。

だから、自分以外の未来を見ていたのだ。自分にとって、ノーリスクな情報のみを。

そのことで、彼が特別に臆病だとは思わない。

誰だって、自らを直視するには、それなりの覚悟がいる。

私には、それがわかる。

第二章　音漏れたん。だだ漏れる。

インターネットで変わった死に方をした人がいる。事件発生当初、私の『こっちみんな』に対する認識は、この程度のモノだった。詳細も知らない。だから初めて新聞部の部室で、拓留に詳細を聞いたときは、ゾッとした。

拓留が学校をサボった日。最初は一人暮らしで身体を壊したのか、何か事件に巻き込まれたのかと心配したが。新聞部のストレージに上がっていた画像を見て、サボった理由を理解した。

それは『こっちみんな』の事件現場を外から撮った写真で。陽の高さやアップされた日付から見て、拓留が学校をサボって撮影に行ったのは、間違いなかった。

でも、なぜそうまでして……いくらなんでも、こんなに事件に入れ込むことはなかったのに。

新聞部の部室で、拓留が『こっち見んな』ともう一つの猟奇事件の共通点を語り出した。

「日付が、六年前の事件とぴったり一致してるんだ。事件も自殺っぽいっていう内容はともかく、猟奇的だという点で同じ」

拓留は『こっちみんな』を追っているのではなかった。『こっちみんな』に端を発する連続猟奇事件を追おうとしていたのだ。

第三章　回り続ける回転DEAD

――9月29日――

　9月7日『集団ダイブ』『こっちみんな』
　9月19日『妊娠男』『音漏れたん』

　地図に並べて貼られた、六年前と現在の事件。この日付の関連性に気づいたとき、きっとおそらく私たちは、事件に魅入られてしまったに違いない。

　拓留（たくる）は、新聞部に集まった世莉架（せりか）を除く三人の前で、二つの事件が六年前と同じ日付に起こったことにより、事件はニュージェネの狂気と繋がっていると主張していた。そして今日は9月29日、六年前に『張り付け』が起こった日。今日何か起これば、この説は関連性を無視できなくなる。
「もし今日、渋谷でまた妙な事件が起こったら、そのときは間違いない。偶然が三つ続くだなんて、放っておける要素じゃないだろ」

第四章　満ち満ち足りて、ごっつぁんDEATH

碧朋学園文化祭。私たち学生にとっての一大イベント。私も生徒会長として、何度も運営に携わってきた。今でもミニポスターが、部室の壁に貼られている。すでに過ぎ去った祭り。いや、正確には、ニュージェネレーションの狂気の再来によって、殺されてしまった祭だ――

■

――10月9日――

学校において、最も大きなイベントの一つとも言える文化祭。そんな大事なイベントの直前、生徒会長である私は自室で休んでいた。とんだ生徒会長さまだ。

刺された傷は内臓を傷つけなかったが、一〇針縫った結果、激しい動きは禁物となる。仕方ないことだった。でも、私にはやるべきことが、生徒会の仕事以上に、大事なことがあった。

「よし。これなら、抜糸しても傷跡はそんな残らねえな。熱もないみたいだし、順調だ」

第五章　埋められた世界の話

　新聞部に残っていた文化祭のポスターを剝(は)がし、丁寧(ていねい)に畳(たた)んで仕舞う。開かれなかったお祭り、もう意味のないポスターでも、くしゃくしゃにして捨てる気にはなれなかった。

　でもきっと、文化祭の準備をしていたこの頃が、私たちが日常を謳歌(おうか)できた最後のときだった。事件は、徐々に私たちを追い詰めていき、埋もれていた過去もまた、蘇(よみがえ)って——

■

——10月10日——

　文化祭当日、私は大事を取って、家で休んでいた。昨日無理をしたわりには、痛みは落ち着いている。夕方の終わり間近なら文化祭に行けそうだ。父さんが所用で外しているのをいいことに、自己判断なのだが。

「えー、拓留(たくる)兄ちゃんの晴れ舞台、観たかったのに。夕方じゃ間に合わないよ」

そんな予定を聞いた結衣が頬を膨らませる。結衣と結人は、私と一緒に文化祭に行く約束だった。保護者代わりということにはなっているが、実際は二人が私を心配して、ついてきてくれるのだ。何かあったときはすぐに言ってね。結衣も結人もトーンに違いはあるものの、同じことを言ってくれた。
拓留と渡部さんの対談。兄の晴れ舞台を見たという気持ちはわかる。私の場合は、晴れ舞台と言うより、漠然とした不安があった。
スマホが震え、着信を知らせる。発信者は学校にいるはずの川原くんだった。
『大変だ来栖！　文化祭は、もう！』
もしもしの挨拶は、川原くんの切羽詰まった様子に遮られた。
「ちょっと、落ち着いて。何があったの？」
『また宮代のせいで……違うな、宮代は悪くない。でも』
「拓留に何かあったの⁉」
『落ち着いてくれよ！　俺だって、どう説明したものやら』
つい数秒前に言ったことを、そのまま返される。私も、拓留の名前が出たことで、一気に興奮していた。
「なら、本人にこっちに連絡するように。ああ、あの子、スマホいま、持ってないんだった。もし良かったら、川原くんのスマホを拓留に」
『そ、それは無理だ。宮代は……さっき、警察に連れて行かれた』

今度はいったい、どんな巻き込まれ方をしたんだろう。軽い目眩を覚える。

「大丈夫⁉」

近くにいた結衣と結人が、慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「ええ。平気よ」

「拓留兄ちゃんに、何かあったの？」

「まだわからないわ。ごめんね。今日は文化祭に、行けないみたい」

学校の様子もそうだが、いままで痛くなかったお腹の傷が、じくじくとこちらを蝕（むしば）みはじめていた。

夜、警察から開放された拓留は私の部屋にいた。私に呼び出された拓留は、何か怒られると思っている様子だった。

「傷に障（さわ）るだろ？　ちゃんと寝てないと――」

心配しているように見せて、話をそらす気だ。

「また、警察に連れて行かれたって聞いたんだけど。この情報に、間違いはないわね？」

「だ、誰の情報？」

「そんなの誰だっていいでしょ？　それより、本当なの？　どうなの？」

「っ、それは……」

「さっきから黙っているなんて、いったいどうしたんでしょうね。もしかしたら、私の声が聞こえなかったんでしょうか」

　事実はもうわかっているんだから、無駄な抵抗をしても意味はない。

「そういうことなら、もう一度お聞きしましょうか？　さきほどのお話は……」

「き、聞こえてます！　大丈夫です」

　拓留は、やっと言い逃れすることを諦めてくれた。

「そう。だったらどうしてお返事してくれないのかしら？」

「す、すみません」

「まあいいでしょう。それで？」

「は、はい。さっきの話は、その……本当です」

「……………」

「あっ、でも、それは僕のせいじゃなくて、事件が起きたんだからしょうがないっていうか！」

　拓留は、今日あったこと、渡部さんの死について話はじめた。

　一日にあったことを聞く、やっていることは昨日の屋上と同じなのに、いまは昨日とはまったく違った気持ちだった。

「でもさ、最近、なんか少しおかしいと思ってるんだ……」

　一部始終を語り終えた拓留は、妙なことを口にした。

「おかしい？　何が？」
「最初はさ、もちろん僕たちから興味を持って、事件のことを調べてた。けど……最近は、その事件自体が、逆に、僕らを追ってきてるような……そんな気がするんだよ」
拓留が言いたいことは、実は私もうっすらと感じてはいた。でも、いやだったらなおのこと、事件から距離を取り……事件に捕まらないように早く逃げ出すべきなのに。
「昨日……」
一度、言葉とともに、胸がつまった。昨日あったあの屋上での時間が、すべて無駄になろうとしている。
「昨日、言ってくれたわよね？」
「う……？」
「昨日、考えるってそう言ってくれたわよね？」
「それは……僕だってそのつもりだったよ。でもさ、でも……今日またいろいろあって、それで新しくわかったことがあるんだよ」
「わかったこと？」
「そうなんだ。さっき部室でみんなと話してたんだけど、今回の事件の被害者には共通点があるんだよ」
「……………」
拓留は、昨日より前の彼に戻ってしまっていた。事件を追い、危険に足を踏み入れ、特別でありたいと願う少年。渡部さん死が、拓留の眠りかけていた興味を再び起こしてしまった。

「その共通点とは何かっていうと、実は……」
拓留の言葉がつまる。どういえば私の理解を得られるか言葉を選んでいる。そんな感じの躊躇に思えた。
「実は一連の事件の被害者って……みんな特殊な現象を体験していたみたいなんだよ。未来を見たりとか、人の心を読んだりとか、念写とか……つまり、ええっと……超能力ってことで……」
拓留は、真相に近づいていた。
「ちょう……のうりょく……？」
間の抜けた私の返事を聞き、きっと拓留は私がそうした荒唐無稽なものを嗤っていると思っただろう。でも、真意は真逆だ。私はもう、拓留が口にした力の存在を、ギガロマニアックスの存在を知っている。そして彼らに接近することは、六年前の不幸、もしくはそれと同じくらいの不幸に見舞われる可能性があることも。
拓留がこれ以上、事件に関わり続けることが怖かった。なぜなら、拓留が先日潜入したというＡＨ総合病院とギガロマニアックスには、深い関わりがあり……拓留はまるで何かに誘導されているかのように、その暗闇に近づいていた。
「この予想が本当なら、事件そのものだけじゃなく、世界的な常識を根本から覆すことになるかも知れない。これって、凄いことじゃ――」
語り続けていた拓留が、突然言葉を止めて、私を見た。

「拓留……お願いだから……これ以上はやめて……もう、やめて」
私は、拓留の手を握りしめて、懇願《こんがん》していた。
「来、栖……？」
拓留は、信じられないものを見たという顔をした。私は姉として……来栖乃々《のの》として、この弱さを隠し続けてきたのだから。
「怖いの……私……」
「え？」
「これ以上、あなたが事件に首を突っ込んで……何かあったらと思うと……いてもたってもいられない……怖くて怖くて……」
「…………」
「あなたにだってわかるでしょう？　大切なものを失うのが、どれだけつらいことか……私はもう失いたくないの……家族を……大切な人を……だから、お願い、拓留……そんなおかしな事件を追うのはもうやめて……お願い……」
すがるしかない。願うしかない。たとえ来栖乃々らしくなくても。
「っ……」
こんなときに限って、お腹の傷が水を差す。でも、この程度で摑《つか》んだ手を、望みを手放すわけにはいかない。

「……ごめん……ごめん。ほんとにごめん。そんなに心配させていたなんて、僕……」

拓留から熱気が抜けていく。この言葉は嘘じゃない。

「でも……」

「え……？」

「ひとつだけ、やっておかなきゃいけない事があるんだ。それだけは、許して欲しい」

「それは……大事なことなの？」

「……うん」

「私たち家族より大事なことなの？」

「同じくらい大事なことかな……」

「同じくらい……。いったい何がそんなに……」

「スマホ……取り返さなきゃ……」

スマホ？　そんなものが、ネットと繋がるだけの道具が、私たちよりも大事だなんて。

「そんなの……！」

「ダメなんだ。あれには新聞部のデータが入ってる。それにここのことも。もしそれが見られたら……」

「データって……連絡先とか、取材の成果とかでしょ？　それにロックだってかけてあるって……」

「うん。でも、もしものことだってあるし……」

そのとき、いきなりスイッチを切られた掃除機みたいに、拓留の言葉と動きが止まった。

「うあああああ!?」

拓留が突然苦悶の声を上げた。

「拓留っ?　どうしたの、拓留!?」

「はっ……!?」

顔中から冷や汗を垂らし、息も荒い。なんでもないとは言っているが、何かあったのは明白だ。いまの一瞬、拓留は何を思ったのだろう。

「とにかく、あれだけは何としても取り返さなきゃならないんだ……」

固い声でそれだけ言うと、拓留は私に背を向け、部屋をあとにした。私の懇願は届かなかった。いや、届かなくなってしまった。直感的に、それを感じた。

出ていこうとする拓留を攻める結衣の声が聞こえた。でもその声はすぐに消えた。思わずベッドから転がり落ちてしまい、お腹の痛みはさらに増した。

拓留はおそらくＡＨ総合病院に、再び足を踏み入れる。でもあの病院は危険なのだ。私は、それをよく知っている。

止められなかったことが苦しすぎる。ベッドから転んだ拍子に床に落ちたスマートフォン。震える指で操作し、開いた画面に出てきた名を見た途端、恐怖が蘇った。

それから数日間、私は動けなかった。傷の具合がよくないこともあるが、何をする気にもなれなかった。拓留だけでなく、世莉架や伊藤くんとすら連絡が取れない日が続いた。

『もしもし、のんちゃん？』

世莉架と連絡が取れたのは「便りがないのは無事な証拠」という言葉では、そろそろ自分を誤魔化せなくなった段階のことだった。

「世莉架。よかった……！」

スマホの向こうから聞こえてくる声が、無性に懐かしく、それだけでまずささくれだった心が癒やされた。

『ど、どうしたの、のんちゃん？』

「拓留、ＡＨ総合病院に、また行ったんでしょ？　拓留は無事なの？」

『タク？　いま、トレーラーハウスで疲れて寝てるよ』

ひとまず胸を撫で下ろす。最悪の事態には至っていないらしい。

「それで、あそこで何があったの？」

思わず世莉架を問い質すような形になってしまう。

『な、何もないヨ？』

声が、あまりにもわかりやすく上擦っていた。

「お願い、世莉架。話して」

絶対に、何かあったのだ。心中で謝りつつ、私は語気を強める。
『昨日の夜、タクと私と真ちゃんの三人でまた病院に行ったんだ……』
少しの沈黙の後、世莉架はゆっくりと語りはじめた。

■

私とタクと真ちゃんの三人は、まず非常口から病院に入って……それから、タクのスマホを拾った女の子を捜そうとしたんだけど……たくさんの人がこっちにやって来るのがわかってね、急いで近くの部屋に隠れたの。金属のロッカーがたくさんある部屋で、かいぼうしつ？　ってところ。
ロッカーはなんとか二人ぐらい隠れられるスペースがあって、私はそこに隠れようって言ったんだけど、二人はなんだか嫌がって……。
「タクッ。もう一人、入れるよっ」
「えっ?」
「わ、私ひとりじゃ怖いよっ。お願いだよっ」
「伊藤っ、悪いがここに三人は無理だ。お前は隣へっ」
「いいいっ?」
「尾上を一人にしとくワケいかない!」

「俺だってこんな所に一人はいやだ！」
結局、私とタクが一緒に、真ちゃんはタクに押し込められるようにして、一人でロッカーの中に隠れたんだ。そしたら部屋に、いろんな人を引き連れて、タクのスマホを持ってった女の子が入って来て。怖かったんだけど、タクが励ましてくれたおかげで、なんとかがんばれたんだ。
そしたら女の子がなんだか配電盤をいじりはじめて、隠し通路がガゴン！　って出てきて、女の子とたくさんの人は、隠し通路に入って行っちゃったんだ。
みんないなくなったんで、私とタクは外に出て、別のロッカーに隠れていた真ちゃんも出してあげて。
「す……すまない。非常事態だったんだ」
「非常事態じゃなかったら、今頃ただじゃ済ましてねーぞ、てめー」
「ほんと、悪い」
出てきた真ちゃんはすっごい疲れてて、タクは平謝りだったんだけど、なんでだろうね。真ちゃんのロッカーには〝先客〟がいたとか言ってたけど。
隠し通路の扉は閉まっちゃってて、女の子はその中だしどうしよう？　と思ってたら、ちょっとだけ扉が開いててね、思いっきりタクや真ちゃんが力を入れたら、開いちゃった。
階段の先は、下に続く階段で……歩いているうちに、タクと私は気づいちゃったんだ。この地下って、昔、私たちが小学生の頃、探検しているうちに入っちゃった、変なところなんだって。都市伝説の『あみぃちゃん』を探しているうちに、入っちゃった場所。

私たちみんな怖くなって、パニックになっちゃったんだけど、
「おとなしくしろ。それ以上、バカでかい声を上げるな。静かにするなら、放してやる。でなければ、このまま絞め落とす」
って、私たちとは別に地下に潜入してた久野里さんが止めてくれて。それは助かったんだけど、あの人、こっちの話はなんにも聞かないで、帰れ！　って言うから……。
「私たちは、やらなきゃいけないことがあって来たんです。そんなふうに頭ごなしに帰れって言われても、帰れません」って私、言い返しちゃった。
あんまりに久野里さんがひどいから、つい私もカーッとなっちゃったんだ。
「理由も話せないような人の言うことになんて、従えませんっ」
「きさま……」
「さ、タク。真ちゃんも、行こっ。急いでタクのスマホ見つけなきゃ」
「あ、ああ……」
喧嘩別れしちゃうところだったんだけど、そこで久野里さんが嫌ーな感じで、ならついてこい、でも逆らうなって。
でも、結局のところ久野里さんがいてくれてよかったんだと思う。だって、病院の地下は、昔よりひどかったから。叫び声があちこちから聞こえて、ちょっとおかしい人とすれ違って、叫びそうになったり……あの人が先導してくれなかったら、タクも私も、きっと耐えられなかったんじゃないかな。

久野里さんが向かったのは、パソコンとモニターがたくさんある監視ルームってところ。久野里さんは、なんも説明してくれないままずっとパソコンをいじってて。だから、私「あの？　何を調べてるんですか？」って聞いたの。

そしたら久野里さんが「……この施設で何が行われていたか……だよ」って、ちょっとだけ話してくれたんだ。

でもタクが「この施設って、病院とは何か関係が……？」って聞いたときは、「黙ってろと言っただろうが」って、久野里さん、すっごく怒った。っていうか冷たかった。ウチの学校の人みたいだけど、タクが前になんか失礼なことしちゃったのかな……？

それからしばらく、〝りんしょうじっけん〟とか〝ろーるしゃっは〟とか〝じしょうへんい〟とか……難しい言葉ばっか出てきてよくわかんなかったんだけど、あの病院は地下でこっそり、人体実験してたんだって。途中で、力士シールにそっくりな11番目のろーるしゃっはって画像を見て、タクが吐いちゃったりして、大変だったんだよ。

それで、施設について調べているうちに……のんちゃんに話したことあったっけ？　昔、私たちが病院に忍び込んだときに、変な実験を受けている子がいてね。その子が助けてって言ってたのに、私たち、逃げちゃったんだ。名前も知らなかったその子が、南沢泉里（みなみさわせんり）って名前だってことがわかって……南沢さんが行方不明のままだって聞いたとき、タク、すごくやりきれない顔をしてた。友人だったって言うくらいだし、きっと、無事でいてほしかったんじゃないかな。

そのあと、タクのスマホを拾った子が、山添うきって名前なのもわかったんだ。その子は渋谷地震のときから六年間ずっと、見捨てられちゃったこの施設の、掃除やほかのひけんしゃさんのお世話をしていたんだって。最後、全部調べ終わって地下から脱出するときに久野里さんが「うきちゃんを外に連れて行く、スマホのことは後で聞け」って言い出して。

うきちゃんの場所は監視カメラでわかってたから、うきちゃんのいる部屋にみんなで行ったら、うきちゃんは言葉も上手く話せない、たくさんのひけんしゃさんの面倒を一人で診ていて……。

「いいから来いっ！」

結局久野里さんが無理に連れて行こうとしたんだけど。

「えええっ⁉」

うきちゃんは、そもそもなんでそんなことになるのか、わかってなかったんだ。だって、私たちだって、こんな所にいるのはよくないなーぐらいしかわかってなかったんだし。

「警備に気づかれる！　早くしろ！」

「だから、あなたは誰ですか⁉　いったい何ですか⁉」

「お前をここから解放してやる！」

「そ、そんな！　いやです！　やめてください！」

うきちゃんは嫌がったんだけど、結局久野里さんがうきちゃんを気絶させて、連れ出しちゃったの。そのまま私たちは、外まで久野里さんについて行って。途中でうきちゃんは久野里さんの知り合いの女の人に

預けて、そのまま私たちは、久野里さんが住んでいるアパートに案内されたんだ。
あー！　そういえば、久野里さんって、ケイさんだったんだよ！　ほら、あの渋谷にうずの、タクが情強の中の情強って尊敬している！
「嘘……もしかして……ケイさん……？」
「え？　嘘、マジ⁉　ケイさんって、あのケイさん⁉　渋谷にうずの？」
わかったときは、タクも真ちゃんも、すっごく興奮してた。二人にとって、憧れの人だったからね。でも、久野里さんは、私たちが想像してた優しいケイさんとはかなーり違ってて。病院の地下で見た、11番目のろーるしゃっはな力士シールに反応したタクのことを、いきなり「能力者だ」なんて言い出して。嫌がるタクに無理にシールを見せようとしていたから……。
「いい加減にしてくださいっ！」私、また怒っちゃったんだ。
「いったい、なんなんですか⁉　タクに『ちょうのうりょく』って、そんなアニメやマンガみたいな話、真面目にして！　どうかしてますよっ！」
「何？」
「タクは、人が殺された場所とかで、いっぱいあのシールを見てきてるんです。気持ちが悪くなるの、当たり前じゃないですか⁉　私だって、ラブホのときのこと思い出して吐いちゃいそうになること、ありますけどっ⁉」
「……」

「そんなくっだらないことが証拠だっていうんなら、私にだって『ちょうのうりょく』があるってことになりますよねっ?」
「いや。お前は、違う」
「なんでですか⁉」
この人、会ったときからずっと、タクのことだけバカにしてるから、私我慢できなかったんだ。
「お、尾上、その……ありがとう。けど、ちょっとだけ抑えてくれ」
でも、タクはね、怒る私を止めてくれたの。
「え⁉　でもっ!」
「い、いいから……本当にサンキューな」
タクは自分のせいで喧嘩になるのが嫌だったんだろうけど、きっと久野里さんが話していた能力のことも気になってたんだと思う。前からタク、この事件には能力が関わっているかもって言ってたし。
そしたら久野里さんはどこかに電話をかけたあと、
「また出かけるぞ。まぁ、今度は命の危険はないだろう。安心するがいい」
そう言って、また私たちを別の場所に連れていったんだ。
私たちが連れていかれたのは、いつもの喫茶店の、ＬＡＸだったの。
「用が済んだらすぐに帰りますから」

「遅かったな」
「私にだって準備くらいあるんです」
「あれぇ？　ひなちゃんだー」
　なんとビックリ、久野里さんがＬＡＸに呼び出したのはひなちゃんだったんだよ！　ああうん、有村さん。この間、初めて会って、私はせりで、向こうはひなちゃん。そんな呼び方になったんだ。
　ひなちゃんを呼び出したのは、久野里さんだったんだけど……。
「っていうかぁ～。久野里さん。便利に使って巻き込むのはやめて欲しいって言いましたよね？」
「互いに情報の提供をする。そういう約束だろう」
「そっちばっかり私を利用してるくせに」
「いいから座れ」
　なんだか久野里さんとひなちゃんは、あんまり仲がよくないみたい。
　久野里さんが、ひなちゃんを呼んだ理由は、タクを能力者なんだとハッキリさせることみたいだったんだけど、答えはすごくあっさり出ちゃった。
「宮代拓留が能力者かどうか確証を得たい」
「い、いや、だからですね。僕はそんな――」
「間違いなく能力者ですよ」

あんまりにあっさりすぎて、私もさすがにそのときは、信じられなかった。でも、ひなちゃんとタクが話しているのを聞いているうちに、だんだん本当かもって気分になってきたんだ。

「自分がこうなって欲しいと思ったところで、いつも特別なことが起きたりしたでしょう？　たとえば、例のラブホテルに先輩が潜入したとき。あのとき、部屋には確かに鍵(かぎ)がかかっていたんですよ。なのに、先輩はどうやって入ったんです？」

「ウソだ。鍵は開いてた」

「いいえ、閉まってました。けど、いきなり開いたんです。……だよね、せり？」

いきなり話をふられたので「う？」と少し驚いちゃったけど、あのときラブホテルの鍵は……。

「……確かに、ガチャって……」

「尾上!?」

タクがビックリして問い質してきたけど、本当なんだからしょうがなかったんだよ。あのとき、ラブホテルの部屋の鍵は、私たちの目の前でカチャっと音を立てて開いたんだから。

「おそらく、望んだように物体を動かす能力……いわゆる念力。あるいは念動か……それを持っている」

久野里さんが言うには、タクの能力はそういうものなんだって。ラブホテルだけじゃなくて、さっきの病院の隠し通路のときも、ちょっと不自然なぐらいなぐらいに、運良く扉が開いていた。タクの能力が、自由にものを動かせる能力なら、それも納得かなって。

それでもまだ信じないタクをみて、ひなちゃんが妙な質問をしはじめた。

「先輩？　いまから言う質問に、すべて『いいえ』で答えてください」
「は？　な、なんだよ、いきなり？」
「いいから答えてください。いいですね」
「は、はい……」
　ひなちゃんに気圧され、タクは頷いちゃった。
「自分のクラスの人間は、バカばっかりだと思っている」
「え、えと……いいえ……」
「でも、本当はその輪の中に入りたいと思っている」
「いいえ……」
「ひとりでカラオケに行ったことがある」
「いいえ」
「ひとりでカラオケに行ったけれど、一曲も歌ってはいない」
「いいえ」
「来栖先輩と一緒に暮らしていたとき、来栖先輩のお風呂を覗いちゃったことがある」
「いいえ」
「なるほど、わかりました」
　タクの答えを聞いたひなちゃんは、なんかちょっといたずらっ子みたいな感じで笑ってた。

「わ、わかったって、何が？」
「まず最初の質問。宮代先輩は、みんなバカばっかりだと思ってますね」
「そ、そんなことは……」
「それから次。そうは言っても、本当は寂しくて、みんなの輪の中に入りたいと、そう思ってます」
「ち、違う！　僕はあんな、なんの生産性もない会話になんて——！」
「カラオケにひとりで行きましたね」
「そ、それは、新聞部の取材で行っただけだ！　でも歌っては——」
「それは嘘です」
「え⁉」
「本当は歌いました」
「う、歌ってない！」
「一曲だけですか？」
「だから、歌ってないってば！」
「なるほど。一曲だけ歌ったんですね」
「う……」
　タク、歌ったんだ。『こっちみんな』で貼られている力士シールを撮るために入ったんだから歌ってないって、私たちに言い張ってたのに。

え？　お風呂の話？　……タクは事故だし目をすぐにつぶって見てない！　って言ってたから、のんちゃんも忘れてあげてほしいな。

「他人の口にした言葉が嘘か真実かわかる──それが私の能力なんです」

ひなちゃんの力は、嘘を見抜く能力。でもいまのやり取りだけじゃ、単なるほっとりーでぃんぐ？　かもしれないって、タクはまだ疑ってたんだ。

でもあることで、タクは自分が能力者だって、認めちゃった。一緒にいた私も伊藤くんもわからなかったんだけど、なんでもひなちゃんがいきなり取り出した〝剣〟が見えたんだって。能力者にしか見えない、不思議な剣が。

それはディソードって呼ばれる剣で、タクやひなちゃんみたいな能力者、ギガロマニアックスって呼ばれる人しか見えない剣なんだって。その人たちは、妄想を現実に変える能力を持っていて……りょうしりきがく？　として、なんとかかんとか。最後まで難しい話についていけなかったんだけど、最後に久野里さんがしんみょうな顔で、変なコトを言っててね……

「物理現象すら捻じ曲げるんだよ。ギガロマニアックスの妄想と、それによって共通認識化された現実は。だからこそ、それは……この上なく危険なんだ」

おかしいよね、だってタクにいうことじゃないよね。タクが危険なわけ、ないのに。

■

解剖室の隠し通路。
地下で出会った、同じ侵入者、久野里澪。
震災前に行われていた、被験者を使っての人体実験。
力士シールの正体、11番目のロールシャッハ。
研究終了後、地下に放置されていた被験者たち。
被験者の世話をしていた少女、山添うき。
能力とギガロマニアックスとディソードの存在。
拓留がギガロマニアックスであること。おそらく能力は念動力。
そして震災よりもずっと前、病院の地下に侵入した拓留と世莉架が見捨ててしまった少女、南沢泉里。
どうにもふわりとしたところがあるものの、世莉架は一つ一つ思い出し、丁寧に語ってくれた。
「ありがとう。世莉架」
『う、うん。怒らない？』
「なんで怒るのよ？」
『ううん。私じゃなくて、タクのこと、怒らないかなって』
怒る気なんてない。いや、怒る気力がない。

あの病院は、生きていた。やせ細り、骨と皮だけになったような状態で、過ちをそのまま生き埋めにして、存在していたのだ。

「世莉架。あなたに、ううん、伊藤くんや香月にも頼みたいことがあるんだけど」

『何？』

「まだあまり、傷の治りが良くないの。私はいま動けないから、代わりにあなたたちが拓留のそばにいてあげて」

世莉架にそれだけを頼み、電話を切る。

私はこの時点で、ＡＨ総合病院の地下で何が行われていたのかを知っていた。ギガロマニアックスのことも、ディソードのことも。

世莉架が口にした情報の大半は知っていることで、知らなかったのはＡＨ総合病院の地下には、いまでもまだ被験者を押し込めていることと、山添うきの存在。つまり、現在の情報だけだ。

震災よりも前、小学生だった拓留と……世莉架は、興味本位で偶然ＡＨ総合病院の地下に潜入し、同世代の少女、南沢泉里がギガロマニアックス覚醒のための実験台となっているのを目撃した。

椅子に拘束され、瞼を固定され、11番目のロールシャッハ画像をその目に焼き付けさせられる。拷問の如き実験を受けていた少女は、物陰から覗いている拓留の存在に気づき、助けを求めたものの、拓留は逃げ出してしまった。

私は、すべてを知っていた。

なぜなら来栖乃々は南沢泉里と——

これは、いままで隠し続けてきた秘密。もしかしたら、話すことで、すべてを失うかもしれない。碧朋（へきほう）学園生徒会長で青葉寮（あおばりょう）の一員で、今現在の来栖乃々という人間のすべてが崩れ去ってしまうほどに、この秘密は重い。

未だに悩む私を後押ししてくれたのは、電話で私の声を聞き、不審に思って見舞いに来てくれた世莉架だった。

「ちょっとね。のんちゃんの様子がおかしいなって思って」

「電話の声がね、元気がないなって」

「とにかく。変だなって思ったの。だから来たの」

この子は、なんて素直に動けるんだろう。まったく。この娘には、かなわない。

私も、彼女を見習おう。

拓留や家族や新聞部のみんなを守りたい。自分の一番したいことに、従おう。

「世莉架……言ってたわよね……例の病院の地下で、その……南沢泉里っていう子の情報を見たって……」

「う、うん」

「これ……」

私が見せたスマホの画面を見て、目を丸くする世莉架。
表示されている写真に写っているのは、六年前の写真。体操服を来た、まだ幼い来栖乃々と川原くん、そして南沢泉里。いまでは数少ない、乃々が泉里の友人であったという、証だった。
明日、学校の帰りに青葉寮に寄って欲しいとの拓留への言付けを世莉架に頼み、私はそのときに話すべきことを数時間ずっとベッドで考え続けていた。
「嘘や隠し事はなしか……」
全部話そう。隠していたことをすべて拓留に告白する覚悟を決めた。
拓留が青葉寮から出て行ったあの日……彼の両親が、震災時の事故死ではなく、避難所で強盗に殺されたという真実を、私たち家族が隠していたのがバレた日。良かれと思ってと言い訳する私たちに、拓留は激昂（げっこう）した。
もしかしたら、あのときよりもヒドいことになるかもしれない。いや、絶対になる。でもこれはもう、避け得ぬことなんだ。
何やら、階下で物音がしているのに気づいたのは、そんな考えにふけっているときだった。結衣も結人ももう寝ているし、父さんはもう上にいて動く様子もない。私は傷が開かぬよう、ゆっくりと階段を降り、診療所に繋がるドアを開けた。
「誰？　拓留……？」

「あ……！」
しまったという顔をしている。世莉架の伝言を聞き、明日まで待てずに、来てしまったのだろう。この予想は当たった。しかし、この驚いた顔は予想外で、もっと予想外な人がそこにいた。
「あ？　有村さん？」
「え、えっと、その、お邪魔してまーす」
人の嘘を見抜く能力を持つギガロマニアックスで、随分と私の不安を煽ってくれた一年生。私にとって、謎の存在だった有村さんが、治療用の椅子に座っていた。
二人の様子をじいっと確認しているうちに、大変なことに気づいた。
「ふたりとも、怪我してるじゃない！」
身体中の至るところに擦り傷と火傷を負っている。この傷の負い方、まるで、ついさっき火事にでもあったかのようだ。私は、自己流で治療をしようとしていた拓留から薬を奪うと、しぶる二人の治療をはじめた。

「で、何があったの？」
処置を終えたところで、二人に聞く。
「あー、それは……」
「私たち、襲われたんです」

言いよどむ拓留とは対照的に、有村さんはストレートに事実だけを述べた。
「襲われた？」
「はい。炎を操る能力を持った女に……」
「……」
能力者が、二人を襲った？
「こういうときは、変に隠すとかえって嘘っぽくなるんですよ、先輩。相手にも、余計な心配をかけます」
「え？」
「つーか、宮代先輩の嘘って、私の能力なんかなくてもわかりやすいですし」
それは、確かに。
有村さんに促され、拓留は自分の口で、ここに来るまでに何があったのかを話しはじめた。
今日のうちに私と話をしようと思い、青葉寮に行こうとトレーラーハウスを出ると、大量の力士シールが拓留を待ち構えていた。どれもこれも、能力者を刺激する、11番目のロールシャッハ、デザインが違う類似品ではない、本物の力士シールだった。
しかもトレーラーハウスの周辺だけでなく、いつの間にか街中に貼られていた、拓留が街中を必死で逃げ惑っていると、同じように街中の力士シールに追い詰められていた有村さんと出会った。二人とも、精神的にも肉体的にも追い詰められ、その治療のため、改めて青葉寮に向かうことになった。

そこを、真っ赤な服を着た女に襲われた。虚(うつ)ろで暗い炎を目に宿す、謎の女。一目見ただけで、危険な存在だと理解できた。

「……見ーつけた」

女はざらついた不快な声でそう言うと、拓留と有村さんに近寄り、虚空から炎を発生させた。

女は発火能力(パイロキネシス)を操る能力者だった。類を見ない危険な能力者は、アスファルトごと溶かす勢いで、二人に襲いかかった。

あまりの火力に、手も足も出ない拓留と有村さん。でも追い詰められたそのとき、拓留はついに、自分のディソードを目にした。

引き抜かずに、ただ炎を断ち切るイメージを、剣にぶつける。渦を巻いていた炎は、拓留の力で押し戻され、女を炎ごと吹き飛ばした。

だが、女はまだ動けた。そして拓留と有村さんは、もう動けなかった。殺意を隠さぬまま、女は拓留ににじり寄り、そのまま通りすぎてどこかへ行ってしまった。女の真意はわからぬものの、拓留と有村さんは、なんとか命を繋ぎ、こうして青葉寮まで来たという。

「──ということで、理由は僕たちにもわからないんだ。でも、あの女は、間違いなく僕たちを狙ってきた」

なんとも現実離れした話。だが現状と、拓留たちの怪我を見るに、おそらくこの突拍子もない話は、真実だとわかる。

「あの、宮代先輩？　見えますかそれ……」
「え？」
　有村さんに何事かを指摘された拓留は、空中をぼんやりと見つめ、おもむろに手を伸ばした。
「拓留？　何をしているの？」
　私は、拓留に尋ねる。
「……剣があるんだ。ここに」
「剣……？」
「やっぱり出せるようになったんですね、自分のディソード」
　有村さんに言われ、拓留と私は、いまここにある剣の正体を理解した。
「自分の……？」
「はい。それが先輩の剣（ディソード）ですよ」
　思わず、先日の世莉架の報告を思いだした。
『タクはディソード？　は見えてるみたいだけど、自分のディソードはまだ持てないみたい』
　世莉架の報告と、いまの自分の剣を持った拓留を並べてわかるのは、拓留は謎の女の襲撃により、ディソードが出せる段階まで覚醒（かくせい）したということだ。出せるだけで、持つことはできないようだが、それでも拓留は、進化したのだ。
「あのっ、有村さん？」

私は生徒会長ではなく、ただの来栖乃々として、初めて有村さんに話しかける。
「……？　なんでしょう？」
「あなたの知っていること……全部、私に教えて」
「え？　どうしてですか？」
「誰が何のために、こんな事件を起こしているのか、調べるの」
「お、おい⁉」
詰め寄ってくる拓留。当然だ。私は、いままで拓留に言い続けてきたことと、真逆のことをしようとしているのだから。
「お前……事件には関わるなって、ずっと言って……」
「でも、もう遅いんでしょう？　この先も、拓留や有村さんが狙われるかもしれないのよね？」
ただ知らないふりをしていれば、通り過ぎるものだと思っていた。でももう、こうして直接拓留と有村さんを襲うまでに、事態は進行してしまっていた。ならばもう、背を向けることはできない。
いまここで、すべてを打ち明けられたなら。
能力者による襲撃。二人の怪我。有村さんの存在。さまざまなことが重なって、先程まであった覚悟は掻き消えてしまった。
「僕なら……大丈夫だ」

悩む私の様子を察した拓留は、自ら助け舟を出してくれた。あのときとは違うと。思わず、目が潤(うる)んだ。それでも、覚悟が足りないまま、私は話をはじめた。

「今度の事件……私は無関係じゃないの」

大丈夫だと言っていても、思いもよらぬ言葉だったのだろう。拓留はわかりやすく驚いていた。有村さんは驚くというより、不審そうな顔をしていた。

「この前……あなたたちが忍び込んだっていう病院ね……」

「AH東京総合病院?」

「ええ。その病院の地下のこと……私……前から知っていた……」

「は!?」

驚く拓留。自分の追い求めていた謎を、身内がすでに知っていたのだから、当然の驚きだ。

「…………昔、泉理がね……」

「……?」

下の名前だけだと、ピンとこないのか。

「……南沢……泉理のことよ」

「南沢泉理!?　ど、どうして彼女を……?」

「それは……その、ね……」

私は悩みつつ、スマホのキーを押すと、小学生の頃、三人で撮った思い出の写真を画面に映した。

「……これよ」
「あ……っ！　そ、そうか。思い出した。南沢って名前、どこかで聞いたことがあると思ったんだ……川原くんが言ってた。南沢って子が一緒だったって……」
　川原くんなら来栖乃々と南沢泉里の関係も知っている。むしろ私以外に、この関係を知るのは、彼しかいない。
「そう。この写真を撮った頃の私たちは、いつも一緒に遊んでいたのよ」
　来栖乃々、川原雅司（まさし）、そして南沢泉里。多少複雑な関係もあったが、この三人はいつも一緒にいた。
「泉理はね、毎週日曜日に、あの病院に通っていたわ」
　そして、拓留が病院地下で目撃した記録とおりの、脳への危険な実験に参加していた。
「じゃ、じゃあ、来栖は……あそこで何が行われていたのかも、知っていたのか？」
「当時子供だった私には、どうしようもなかったの……それが悔しくて、悲しくて……でも、いまはもう子供じゃない。逃げるわけにはいかないわ。私も、事件のことを知っておかなきゃいけない。そうじゃないと……誰も……守れない……」
　私は、守りたかった。何も知らないまま。いや。知らないふりをして、うろたえるだけじゃ、何もできない。たとえ、私の身に、どんなことがあったとしても、私だけならむしろ――
「仕方、ないですね」
　有村さんは、そんな私の願いを受け入れてくれた。

「私のことは、先輩たちの味方だと思ってて、間違いないですよ」
「そっか」
恩返しだと言って、私たちの味方であることを誓ってくれた有村さん。彼女はいい人だ。でもおそらく、協力を申し出てくれたのは、この場において私や拓留の言葉に、嘘がなかったからだ。嘘をつく人間とは、彼女の能力と性格から、決して組めないだろう。
ごめんなさい。
私は、拓留と有村さんに、心の中で謝る。いまの告白には、話していないことと、一つの大きな嘘が混じっていた。有村さんの能力に引っかからないよう、慎重に言葉を選んで。
ここに至っても、まだ私は――

■

数日後、私は学校に復帰した。生徒会への陳謝や、学園祭の事後報告。細かなことを片付けた後に向かったのは、新聞部の部室だった。新聞部には、拓留や世莉架や伊藤くんに香月といったいつものメンバーに加え、昨晩協力者となった有村さんがいた。
「げ……副部長」
うわヤバい！　との声が聞こえてきそうな、伊藤くんのリアクション。

「もう話、はじまってる？」
「ああ、いや！　俺たちは別に、例の事件についての話とかこれっぽっちも――」
　私はいったい、なんだと思われているのだろう。
「来栖も一緒に、事件の解明をしてくれることになった」
　一瞬、沈黙がその場を支配する。
「えっ？　そうなのか？」
「ええ。みんなのお目付け役ってところね」
　多少の心配はあったものの、みんなの晴れやかになった顔を見て、守るという選択が間違いでないことを確認する。それにしても、この笑顔。本当に最近の私は、どう思われていたんだろう。
　私というブレーキ役が態度を変えたせいか、みんなの意見もスラスラと出てきた。
「人によって使える能力に違いがあるのはなんでかなーって」
　世莉架のハテナに拓留が答える。
「たぶん、願望なんじゃないかと」
　次に疑問を呈したのは、伊藤くんだった。
「被害者は全員、能力者だよな？　犯人はどうやって、ターゲットの能力者を見つけてるんだ？」
「犯人は、能力者を特定するために、たぶん力士シールを使っているんじゃないかと思うんだ。正確には、11番目のロールシャッハ。あのシールを見せられた能力者は、激しい反応を示すって」

さらりと答える拓留。贔屓目抜きで冴えていた。
私や有村さんの話に病院地下での発見。さまざまな情報は、推理の手助けとなった。そして、まったくわからなかったのは、やはり拓留と有村さんを襲撃した、謎の女だ。発火能力を持つこと、いままでの事件の周りで連続放火事件も起こっていたこと。
そんな中、出た推理の中で最も気になったのは、彼女が拓留たちを殺さなかった理由が、殺す日でなかったからという説だった。
いままでの犯行はニュージェネレーションの狂気と同じ日付で行われてきた。だとすると、次の殺す日は、以前にあった『ノータリン』事件と同じ日、10月23日ということになる。今日は15日。まだ23日まで一週間以上あるものの、23日は私たちにとって重要な日になりそうだった。

■

拓留は発火能力者の襲撃をきっかけに、青葉寮に戻ってきていた。きっかけはともかく、拓留が戻ってきてくれたことは、嬉しかった。
みんなと一緒にニュージェネの再来に関わりはじめた私に、新たな出会いがあった。
それは、拓留がＡＨ総合病院の地下に潜入したときに保護した少女、山添うきさんだ。彼女はギガロマニアックスの知識を持つ久野里さんに連れられ、桜ヶ丘町にある信用調査会社フリージアで保護されて

いた。しかし、彼女はある日、唐突に消えた。
　面識があり警察側の協力者でもある神成（しんじょう）刑事の連絡でそれを知った私と拓留は、フリージアに急行した。拓留は未だにスマホをなくしたままだったので、私に連絡が来たのだ。
　フリージアに駆けつけた拓留は、神成さんに食ってかかった。何か急に前のめりになったというか、様子がおかしかった。
　そこには神成さんのほかに、フリージアの所長である百瀬（ももせ）さんと、話は聞いていたものの私は初対面な久野里さんがいた。久野里さんは白衣の下に、碧朋学園の制服を着ている。生徒会長として大抵の生徒は覚えているが、私は彼女に見覚えがなかった。
　百瀬さんが語るあやふやな体験と、久野里さんによる山添うきもギガロマニアックスだという推測。山添さんは、何らかの能力を使って脱出したらしい。
　そしておそらく、山添さんはＡＨ総合病院の地下に戻っている。誰から見ても地獄（じごく）のような場所でも、そこで生きてきた彼女が帰る場所は、そこしかない。
　しかし、あの病院はおいそれと手を出していい場所ではない。あとは神成さんたち警察に任せるしかないだろう。でもフリージアを退出した拓留は、ＡＨ総合病院に足を運んだ。拓留についていった私も、なりゆきで拓留とともに病院近くの植え込みに潜むこととなった。
「神成さんたちに任せないとダメよ。私たちみたいな素人がでしゃばったりしたら――」
　私はここまできておきながら、常識的な忠告を口にする。

「それじゃダメなんだ。山添うきって子は、僕が見つけて青葉寮に連れて帰る」
拓留の返答は、私の想像を越えていた。
「ええっ？　ど、どうして？」
「彼女を――いまの久野里さんには渡せない」
単なる、思いつきではない。拓留の言葉には、覚悟と決心があった。
しかしなぜ、山添さんに、ここまで入れ込んでいるのか。警察を、出し抜こうとしてまで。
「もしここであの子を見放したら……また同じことの繰り返しだ。またこの場所で、誰かを見捨てることになってしまう」
拓留は、以前から南沢泉里を見捨てたことを口にしていた。昔、救えなかった少女を、今回の少女と重ね合わせて。
さらに拓留は、山添さんに対し捕獲という言葉を使い続けていた久野里さんを、南沢泉里を実験動物として扱った病院の科学者と重ね合わせていた。
「そんなことくらいで、南沢泉里が許してくれるとは思わないけど……でも、助けたいんだ」
拓留は正しい。人として正しい。
それでも、拓留は間違っている。南沢泉里を助けられなかったことは、忘れていいことなのだ。
そう伝えたいと思うものの、上手(うま)く言葉にならなかった。当然だ。それを伝えるには、重要な要素が欠けている。そしてそれを口にしようとすればするほど、胸が詰まる。

私は、卑怯者だ。
しばらくしてライトバン向かってきた。車から降りてきたのは、神成さんと久野里さんらしき人影だった。
「来栖っ、向こうが動いた。大丈夫か？　行けるか？」
「え？　あ、うんっ」
私も、地下に潜ることを決意した。危険な場所に独りで潜った拓留を待っているだなんて、耐えられない。それに、潜入の手段となる拓留の念動力を使うには、誰かが、妄想を共有し現実化させるための他人が必要なのだ。
拓留の能力で、神成さんが取り出した鍵を飛ばして時間を稼ぎ、その隙に私たちは病院に侵入した。拓留は慣れた様子で解剖室の隠し通路を開き、その先にある地下へと続く階段を下った。拓留がいなければ、きっと私は逃げ出していた。
先のことを考えるだけで、手が震える。
近づいただけで、息が荒くなる。
廊下を歩くだけで、汗が流れてくる。
「だ、大丈夫か？」
そんな私を、拓留が心配してくる。
「平気だから。ほら、急ぎましょう」

所詮この病院の恐怖は、来栖乃々にとって、伝聞以上のものであってはいけない。その事を改めて、強く自分に言い聞かせ、私は平静を取り戻そうとした。
「う……うっ……」
奥から聞こえてくる泣き声。空っぽとなった施設の何もない部屋で、一人の少女が泣き続けていた。
「……いない……誰も、いない……」
薄紫の髪をした、陰鬱（いんうつ）な顔をした小柄な少女が……いや違う、そこにいたのはサイドポニーで眼鏡（めがね）をかけた、小柄な少女だった。似たような体格ではあるものの、全然違う。
気づけば、私も泣いていた。泣き続ける彼女を、抱きしめていた。
「いままで……よく、頑張ったね……でも、もういいの……だから、おうちへ帰ろう？　ね？」
この娘、山添さん……うきちゃんは、もう一人の南沢泉里だ。地震により、被験者とともに放棄（ほうき）されたこの施設で、彼女は独り、人としての枠からこぼれ落ちた被験者たちの面倒を見続けていた。
もし、南沢泉里が震災で消えていなければ。うきちゃんと同じように生きていたか、それとも、被験者として世話をされていたか。どちらにしろ、うきちゃんは優しく気高（けだか）く、そして悲しすぎた。
私は、うきちゃんを必死に説得した。拓留も、嫌われ者になりかねないリスクを背負って、もうここへは誰も帰ってこないという現実を、彼女に突きつけてくれた。泣き崩れて疲れ果てたうきちゃんを、私たちは家に、青葉寮へと連れて帰った。

幸い、父さんも細かいことは聞かずに、うきちゃんを受け入れてくれた。さらに驚くことに、「どうして、うきちゃんがここに？」と、結衣が愛らしい顔を傾けてキョトンとしている。なんとうきちゃんのことを、結衣が知っていた。うきちゃんは、結衣の同級生だったのだ。でもそれは、震災前の話。結衣が小学校二年生だったときの話なのに、うきちゃんはそのときから肉体的に成長していなかった。これは思い込みでなく、結衣が持っていた当時の写真と、本人たちの会話で実証された。

うきちゃんの成長が止まった原因ははっきりしない。しかし震災後、彼女はずっとあの病院の地下で、放置された被験者たちを世話していたのだ。彼女も震災に、いや、ギガロマニアックスに運命を狂わさされた被害者の一人だといえる。

不安げなうきちゃんに、結衣が話しかける。

「橘(たちばな)結衣。覚えてる？」

「……たちばな、ゆいさん……。あ……」

うきちゃんの記憶の中に、結衣の名は残っていた。それだけで、なんだかホッとする。

「思い出してくれた⁉」

「あ、はい。えっと……お久しぶり、です……」

「もう。同級生なんだから、敬語とかやめてよー」

「で……でも……」

勝ち気な結衣と、内気なうきちゃん。相性はいいし、結人も、うきちゃんと仲良くしようと、頑張っていた。
結衣という予想外の友達のおかげで、うきちゃんと私たちの関係は上手くいった。上手くいかなかったのは、昨日私が初めて会ったもう一人、久野里さんとの関係だ。

「――というわけで、いま、山添うきって子は青葉寮で保護されてる」
昼休みの新聞部部室、拓留は昨日うきちゃんを保護したことの顚末(てんまつ)を、みんなに話していた
「タク、大活躍だったんだねー！」
「んー」
「ダメよ世莉架、香月。あんまりおだてると、いい気になって、また無茶なことするから」
このまま調子に乗って、また危ないことをされても困る。私はお目付け役に戻って、釘を刺した。
「けど、気持ちいいっすねー。いまごろ、神成さんや久野里さん、悔しがってますよー。ざまぁみろです、ぷぷぷ～」
有村さんは、一応、久野里さんや神成さんの協力者と聞いているんだけど……冗談抜きで、有村さんは嬉しそうだった。
そんな和やかな新聞部の空気も、突如開け放たれたドアと、静かな怒りを宿す久野里さんの出現であっという間に粉砕された。

「お前、どういうつもりだ」
「ど、どうって……？」
　猛禽類(もうきんるい)のように獰猛(どうもう)で、爬虫類(はちゅうるい)のように冷徹な久野里さんの目は、睨(にら)まれた拓留を怯(おび)えさせるのに十分だった。
「あいつは重要な証拠なんだ。勝手なことをするな」
　そのまま久野里さんは、有無も言わさずに拓留の胸ぐらを摑(つか)み上げた。
「ちょっと、やめてください！」
「暴力反対ですーっ！」
　世莉架と二人がかりで押さえても、手に負えない。拓留も苦しそうに呻いている。いったいどれだけの力を、どれだけの感情をこの人は持っているのか。
　山添うきという証拠を持って行かれたと怒る久野里さん。山添うきを人として扱う拓留。二人の意見は、絶対に交わることはない。結果的に、拓留は首を締められ続けていた。
　このままでは、拓留が殺されてしまう。
「こいつっ！　放、せよぉっ！」
　拓留が苦しげに叫んだ途端、久野里さんの顔が、苦痛に歪んだ。
　拓留の怒りに気圧されたのではない。久野里さんの手首に、得体のしれない力がかかっている。拓留の念動力が、久野里さんを攻撃していた。

真っ赤な痕と、苦悶の声。きっと、久野里さんの手にはとんでもない痛みがある。それでも、彼女が拓留への締め付けを緩めることはなかった。

久野里さんを嫌う有村さんですら、いまは拓留を必死に止めている。拓留の様子は、尋常でなかった。久野里さんには怒りという感情があるが、いまの拓留からは、もっと熱く制御の効かない激情を感じた。

このままでは、拓留が殺してしまう。

「やめなさい、拓留っ!!」

耳元で叫び、拓留の頬を張る。我に返った拓留を、世莉架と伊藤くんの三人がかりで引き離す。有村さんと香月も、二人がかりで久野里さんを押さえていた。

最悪の事態は避けられた。拓留の顔から、激情は抜け落ちている。

でもその激情は、そのまま私に取り憑いていた。

「お帰りください。ここは部外者がいていい場所ではありません」

有村さんと香月を振り払い、未だ怒り続ける久野里さんの前に立ちはだかる。

「あなたが何のつもりで、うちの拓留やうき、それから有村さんにひどい仕打ちをするのかは知りません。でも、私はそれを許しません」

「お前の許可などいるか。いま、実際に見ただろう。能力者は危険な――」

「いますぐお引き取りください」

この人は、敵だ。

久野里さんにとって、拓留たちは証拠であり実験体であり、どうでもいい存在どころか、憎悪の対象のようだ。彼女が求めているものが、事件の真相なのか、それともまったく別の何かなのか。それはわからない。

でも、拓留たちギガロマニアックスを単なるものとして扱う時点で、私とは絶対に相容れないし、わかり合えない。昨日の拓留と同じで、私の目にも彼女は、病院の地下でいいようにしていた研究者と同じに見えた。

「ああ、ちょっと待ってくれ。ストップだ、ストップ！」

神成さんが、慌てて駆けつけてくれなければ、このあとどうなっていたのかわからない。

やってきた神成さんは、怒って出て行ってしまった久野里さんの非礼を詫び、私たちがうきちゃんを連れ去ったことを不問とし、改めて拓留や有村さんやうきちゃんに、ギガロマニアックスとして脳の検査を受けるように申し出た。

「実は、いましがた、佐久間（さくま）先生に相談をしてきたんだ」

久野里さんが信用できないなら、父さんの友人の病院で検査をしてもらう。父さんは元々、大学の准教授で、きちんとしたツテも持っていると神成さんは教えてくれた。

「父さんが准教授？」

「知らなかったな……」

父さんのその経歴は、私も拓留も初耳だった。

「ただの変なおじさんだと思ってた」
「おいおい。まぁ、あのルックスじゃあ、そう思われるかも知れないけど……」
世莉架が悪気なくひどいことを言っていたが、神成さんのフォローも、結構ひどかった。
それはともかくとして、検査には久野里さんも同席させるが、神成さんがしっかり監視しておく。調停案、妥協案としては理想的なバランスだった。
元々、身体の成長に異常があるうきちゃんは、ほぼ必須。有村さんも拓留も、検査に同意はしたものの……。
「父さんが必要だと言うなら、検査を受けてもいいです。けど、その途中で、もし久野里さんが……その……山添や有村を実験動物みたいに扱ったりしたら…………ぼ、僕だって怒ります。能力を使って、その……検査なんかできないよう、めちゃくちゃにしてやりますから、覚えておいてください」
拓留は、危ないことを口にしていた。以前から前兆はあったが、今日の久野里さんへの攻撃をきっかけに、さらに能力に自信を持ったようで、少し不安だった。
そこに、神成さんから驚くべき情報が伝えられた。
拓留と有村さんを襲撃した女らしき人物が、昨晩巡回中の二人の警察官を襲撃した。手配中の人物だと思い、職務質問しようとした結果、彼女の能力によって焼かれてしまったらしい。おそらくあの、パイロキネシストと同一人物だ。
しかし、本当の衝撃は次の情報によってもたらされた。

逃亡した彼女が落としたもの……それは南沢泉里のIDカードだった。
「そ、それってっ、宮代を襲った犯人が、そのっ……ってことですか?」
伊藤くんがそう言った瞬間、私の身体から血の気が失せていく。なんとかテーブルに手をつき、倒れるのを防ぐ。机の上にあった私のティーカップが転げ落ちて砕け散った。
あるわけない。そんなことはあり得ない。
彼女が南沢泉里だなんて……だって彼女はもう、いないのだ。これはなんの、悪い冗談なんだろうか。
「来栖さん?　もしかして君も……南沢泉里のことを何か知っているのか?」
私の様子を見て察したのだろう、神成さんの目が、刑事の目になっていた。
「あのっ、神成さんっ。そのことは——」
「平気よ、拓留」
庇(かば)う拓留を制し、私は来栖乃々と南沢泉里の関係を語る。説明しているうちに、現実的な思考が戻ってくる。そう、絶対に間違いないのだ。
「でも、泉理は渋谷地震の被災者として慰霊碑にも名前が刻まれています。犯人であるはずがありません」
私は、そう締めくくった。
「そ、そうですよ。あの地震の犠牲になったんだろうって、久野里さんも言ってましたし」
拓留も追ってフォローしてくれる。

「来栖さん。よく話してくれたね、ありがとう。彼女の死の記録が事実かどうかは、いま、警察で再調査を進めている。その状況次第では、申しわけない、改めて署のほうで話を聞かせてもらうかも知れない」
神成さんの声色は、優しくなっていた。私を、気遣ってくれているのだろう。
「構いません。何かの間違いだと信じてますけど」
南沢泉里が拓留を襲うだなんて、絶対に間違いだ。
神成さんは、南沢泉里のことを調べることと、情報の秘匿、再襲撃への警戒を口にし、去って行った。微妙な空気となった中で、誰もが部室の壁に貼ったマップにこれまでの情報を書着込むのを躊躇(ちゅうちょ)していた。
私はおもむろに、ペンを手にした。
「来栖……いいのか?」
私が何をしようとしているのかを理解した拓留の声は、とても痛ましいものだった。
「いいのよ。可能性は書き込むべきだし、これは私しか書けないことだから」
震える手を必死で抑え、いましがた発生した可能性を書き記す。
『パイロキネシストを発見。女は泉里のIDカードを所持』
『パイロキネシスト=事件の犯人は、泉里の可能性』
見ているだけで、吐き気がしてくる。私にしか書けないが、きっと私が書いてはいけなかった情報だ。自分への嫌悪感を必死に抑え、私は黙って部室を後にした。

「ほんと⁉　ほんとにいいの？」
「おう、まかせろや」
　任せろ！　と威厳を見せる父さんは、いつも以上に父親っぽかった。
「やった！　やったよ、うきちゃん！　今日から一緒に暮らせるって！」
　結衣はうきちゃんの手を握り、ぴょんぴょんと跳ねた。
「は、はい。よろしくお願いします」
「も～。だから敬語はいらないってば」
　うきちゃんは正式に青葉寮に引き取られた。同級生だった結衣は喜び、みんな新しい家族の一員を快く迎えてくれた。
　父さんの知り合いの病院で精密検査を受けた拓留と有村さんとうきちゃんに、異常は見当たらなかった。心配されていた脳への影響も陰性、特に異常はない。
　次の事件が起こるとしたら、六年前に『ノータリン』が起きた、10月23日だ。拓留の予想どおり、結局この日まで何も起こらなかった。その代わり、連続放火事件に動きもなく、南沢泉里だと思われる女性が見つかることもなかった。
　私は生徒会の仕事をこなしつつ「宮代に構い過ぎじゃないか？」という川原くんのクレームを受け流し。そんな普通の時間を過ごしていた。みんなも、そうだろう。来たる恐怖に怯えつつ、日常に逃げていた。

■

――10月23日――

　この日、私たちはお互いを守り合っていた。絶対に一人で行動することのないよう、注意する。功を奏したかどうかはわからないが、結果的に放課後までは何事もなく過ごすことができた。

　いままでの傾向から見て、狙われるのは能力者。私たちの中では、拓留、有村さん、うきちゃん……守るべきはこの三人だ。私たち新聞部と青葉寮から連れて来たうきちゃんは、人が少なくなった学校を後にしてカフェＬＡＸに移動した。ＬＡＸは遅くまでやっているし、人の出入りも少なくない。それにこのビルの窓際の席ならば、ビルの入口に誰かが近づいてきたら、一目でわかる。

「有村。ほかのメンバーはともかく、お前は割り勘だ」

「えー、先輩ヒドいっ！　鬼っ！　悪魔っ！」

　飲食代を払ってくれるらしい拓留や、有村さんのお財布事情を抜きにしても、いい場所だと思えた。とりあえず、営業時間ギリギリまでここに陣取る。幸い、ＬＡＸは遅くまで営業している。

　何も起きないいままの数時間が過ぎ、さすがに馴染（なじ）みの客とはいえ店員さんの目が厳しくなってきた。そんなとき、異変は唐突に起こった。

「きゃあっ！」

「うわあああぁぁ！」

突如絶叫した拓留が、隣にいた世莉架を押し倒した。
「何してるの、拓留っ⁉」
反対側に座っていた私は、慌てて拓留を抱き止める。
「来、栖……？」
幸い、すぐに拓留は己を取り戻す。でもいま一瞬感じた力は、凄い力だった。この間の久野里さんを思い出す、人の本気の力だ。
「あ、あ、あの女はっ⁉」
「あの女？」
思わず周りと、ここにいるメンバーすべての顔を見渡す。拓留は、いつの間にか私たちが消え、あの女、おそらくいま私たちを狙っているパイロキネシストの女に殺されそうになったと言っている。でも、私たちも拓留もずっとソファーに座っていたし、不審な人物は誰も来なかった。順番で外を見ていた香月も「んー！」と否定している。
でも、さっきの力と、いまの拓留がかいているヒドい汗は、冗談や見間違えではなさそうだった。この拓留の豹変、ついこの前も目の当たりにしたような……。
私はひとまず、冷や汗を流す拓留の顔をハンカチで拭こうとして、拓留の異変に気づいた。
「た、拓留っ！　あなた、目から血が——！」
拓留の両目から、血が流れていた。だらだらと、頬を赤が伝っている。

私たちが気づかぬうちに、拓留はいったい誰に何をされたのか。ただ血管が切れただけならまだいい。角膜が傷ついていたり、脳に何らかの影響があった結果だとしたら、すぐにでも診てもらわないといけない。

「父さんに診てもらわなきゃ！」

「行こう、タク！」

私と世莉架は、自然と拓留の手を取り、同時に外に連れ出そうとしていた。

「伊藤、有村、香月、山添っ。お前たちも一緒に」

当の本人は、慌てる私たちより気が回っていた。私たちはLAXを出ると、青葉医院に向かった。この時間に細かいことを聞かぬまま診てくれるのは、渋谷広しと言えども、青葉医院の父さんしかいなかった。

「ふーむ。特に異常はねーな。角膜もキレイなもんだし、血圧もほぼ正常と」

父さんの診断によると、拓留の出血は瞼の裏の血管が切れただけとのことだった。

脳の検査もしっかりしていないのに、こんなにあっさり。

「おいおい乃々。そんな、おっかない顔で睨むなって」

「拓留に何かあったらどうする気……？」

「……。わかったわかった」

父さんは手を止めると、カルテとは別のページを開いた。

「拓留。紹介状を書いてやるから、明日また、頭ん中の写真撮ってこい」

父さんはきちんとした設備のある病院への紹介状を書いてくれた。この事件が片付いたら、しばらく一品を夕食でサービスしてあげよう。

私たちが二階に上がると、みんな青葉寮のダイニングルームに集まっていた。

時刻は午後11時。10月23日が終わるまで、あと一時間となった。

「んで？　さっき何があったのか、ちゃんと説明してくれるんですよね、宮代先輩」

有村さんが、拓留に改めて事情の説明を求める。

「……話すよ。例の……パイロキネシストのことだから」

「南沢泉里？」

「う、うん」

私のほうを一瞬だけ見る拓留。親友が、猟奇殺人犯かも知れないということを告発する。私を、気遣ってくれているのだ。

「聞きたいの。だから、ここにいる」

私は自室に行かず、ここで聞くことを宣言した。

拓留の話は、LAXで話したことと変わらなかった。いつの間にか一人になっていて、南沢泉里にトイレの個室まで追い詰められた。でも最後、覚悟を決めてドアを飛び出したら、世莉架を押し倒していた。なぜだか、自分の能力も、使えなかった。

拓留の声は、ずっと震えていた。虚ろな体験なのにしっかりとした恐怖がある。いったい拓留が見た幻覚を、どう解釈すればいいのか。みんな、悩んで黙っていた。

「殺されてたまるか」

有村さんの呟き(つぶや)は、いつかの生徒会で聞いたとき以上の冷徹さがあった。

うきちゃんと拓留が後ずさる。この能力者二人のリアクション。有村さんが、ディソードを引き抜いたのだ。

「お前……何を?」

戸惑う拓留。

「決まってるでしょう。武器ですよ」

有村さんは、間近に迫る恐怖を前に、戦う気でいたのだ。

うきちゃんも有村さんに促され、宙に手をかざす。うきちゃんも、自身のディソードを取り出したのだ。

拓留も同じようにディソードを出すように言われるが、拓留はまだ自分の剣を手にする段階に至ってなかった。役立たずと、有村さんは舌打ちする。彼女は、冷めていた。いや違う、冷めつつも、獰猛な笑みを浮かべている。

「私たち、この前、南沢泉里に襲われました。そして、今日も宮代先輩が。こんなのもう我慢できない。だから……この手で事件を終わらせてやります。南沢泉里を殺して」

「ちょ、ちょっと待ってっ」

思わず私は口を挟んでしまう。集まる注目。
違う、違うのだ。根本的に有村さんもみんなも間違えている。だがその理由は、言えることではなかった。
「あ、あのね……泉里が犯人って、その……本当のことなの？」
自分でも、歯切れが悪いのがわかる。いま、明らかになっている情報だけを使って泉里を庇うものの、みんなの目は同情でしかなかった。罪を犯している親友を必死でかばおうとしている、愚か者を見る目だ。
「けど……。私、見たんだもの。私の目の前で……泉里はガレキにつぶされて」
「来栖先輩。どうして、嘘をつくんですか」
相手の嘘を見抜く有村さんの能力は、私が嘘を付いていると、判断した。
「嘘なんかじゃないわ」
「いいえ。先輩は南沢泉里が死んだところを見ていません」
泉里はあの日、いなくなった。この言葉に間違いはない。しかし——
「あなたの『能力』がどのくらい正確なのか、私は知らない。けれど、彼女はもうこの世にはいないわ」
「そう信じたいだけじゃないんですか？　あるいは南沢泉里が、実は生きていることを知っているとか」
「……もし、仮に……仮に、泉里が生き延びたとしていても……あの娘に殺人なんてできるはずはない。泉里は……とても臆病な子だった。小さな虫を殺すこともできないくらい気が弱くて」

脳裏によぎる、南沢泉里の姿。泉里は脆弱だった。他人を殺すのならば、自分が死んだほうがいいと考えるくらいに。自己犠牲の優しさではない。他人を殺すのが、怖いからだ。思わず声に、彼女の弱さが宿ってしまう。

「私にはどうしても納得がいかない。あり得ないわ」

「……どうやら、今度は本当のことを言っているようですね」

「だから！」

　対峙してわかる。有村さんの能力は、厄介だ。迷いを嘘として捉え、本人ですら思っていない嘘を見抜き、そして追い詰める。誰も信じていない状態の有村さんにとって、この能力は危険過ぎる。目は鋭くなり、迷いを嘘として捉え、自ら退路を断ってしまう。

　いまの私がこの状態の彼女に何か言っても、無駄だ。対応を誤れば、ディソードの切っ先はこちらに向けられる。だから私は、矛先を拓留に変えた。

「……とにかく。泉里が犯人じゃないとしたら、拓留たちの憶測は完全に間違えてしまっているわ。真犯人がほかにいたらどうする気なの？」

　複数犯説は、新聞部で事件を検証した際に、元々唱えられていた。南沢泉里には、パイロキネシスとは違う、もっと直接猟奇殺人に関わる能力を持つ、別の能力者がついていると。

「でも……。だとしても、今日が終わるまでに誰も殺されなければ、僕らの勝ち」

「きゃあああぁぁぁっ！」

階下から聞こえてきた悲鳴が、何かが起こってしまったことを示していた。それに、この声は――

「結衣っ！」

私は、妹の声を聞き、廊下に飛び出していた。

医院の受付付近で、へたり込んでいる結衣。同じく駆けつけた結人や父さんが、必死で結衣を落ち着かせようとしていた。

「何があったの、結衣！」

「あ、う……ああ……乃々(のの)、おねえ、ちゃん……」

気丈な結衣が、恐慌に陥っている。

「しっかりしなさいっ！」

結衣の頬を両手で包んで叫ぶ。結衣の震えがその両手から伝わってきた。

震えるまま、いま見たものを話す結衣。

父さんにお休みの挨拶をしに来た結衣は、玄関がノックされているのに気付き、対応に出た。返事をしてもノックは止まらない。呆れた結衣が外を見たら――

「きゃあああああっ！」

思い出し、悲鳴を上げる結衣。私にできるのは、落ち着かせながら頭を撫(な)でることくらいだった。泣きはじめた結衣は、私に必死にしがみつく。

結衣だけではない。この場にいる誰もが、青い顔をしていた。

ノックの音。それは、拓留たちがラブホテルでの事件のとき耳にした、恐怖が迫る音。その音を、幻覚の中で、ついさっき拓留は聞いていた。彼女はここまで、追いかけてきたのだ。

恐怖を間近に体感したのは拓留だったが、限界を迎えたのは——

「くぁぁぁぁぁ！」

ディソードを手にしたままの、有村さんだった。無茶苦茶な動きで路上に飛び出した彼女を、拓留が追う。

有村さんの絶叫と、必死に止めようとする拓留の声が聞こえてくる。

「南沢泉里ィィッ！　私はここにいるっ！　くだらない小細工なんかやめてっ、さっさと殺しに来いよっ！」

「なんで、こんな目に遭わなきゃいけないのっ⁉　能力なんてなければ良かった！　こんなものさえなければ！」

有村さんは、曲者でも冷徹でもなかった。彼女は必死に仮面をかぶり続け、耐えていたのだ。彼女は協力者であった柿田（かきた）さんの死を目の当たりにしている。実感のある無残な死と、生き残ろうとする必死さ。彼女の精神は、すでに限界だったのだろう。

有村さんの激しい声に当てられ、逆に冷静さが戻ってくる。大開きになった玄関以外、いつもの青葉医院の光景——

「みんな、アレを！」

声を出し、あらぬ方向を見る私の視線の先に、みんなの視線が移る。時間差はあったもの、みんな順繰りに私の言いたいことと、その事実に気づいていった。

「おい、宮代、有村っ!」

まず伊藤くんが飛び出し、世莉架や香月にうきちゃんも遅れて出ていく。私は、泣き続ける結衣から、離れるわけにいかなかった。

「大丈夫。終わったのよ……もう……」

私の視線の先にあったのは、医院備え付けの時計だ

■

——10月24日——

時刻は0時を回り、日付は10月24日に変わっていた。

10月23日は過ぎ去った。

謎の女性によりもたらされた恐怖の一夜。『ニュージェネレーションの狂気の再来』の日は、誰も殺さぬまま、過ぎ去っていた。

第六章　スーパー上手に焼けました

あの夜は、私にとって、おそらく居合わせた全員にとって忘れられない一夜となった。追い詰められることへの恐怖、そして助かったことへの安堵感。安全バーのないジェットコースターに押し込められたかのような時間、あともう少し、日付の変わるタイミングが遅かったら、有村さんだけでなく、私も持たなかったかもしれない。

無事に23日を過ごしたことによる安堵感。過度の安心は、私たちの気を緩め、さらにそれは朗報……と呼ぶにはばかられる出来事で、更に強くなっていった。

■

――10月23日――

数日後、私は拓留の口から、南沢泉里の名を騙った女性の死を聞いた。
自宅マンションで自ら命を断ったと。

第七章　非実在青少女の実在性

部室の隅に転がっていた、クシャクシャに握りつぶされた付箋（ふせん）をゴミ箱に入れる。一度は貼ろうとした付箋を誰が捨てたのかはわからない。

『非実在青少女』

付箋に書かれていたのは、杯田理子（はいだりこ）の死の次に起こった事件の俗称だ。

ニュージェネの再来における、最新の事件。この事件の情報は最も鮮度があり、すでに実行犯が捕まっている。おそらく、最もニュージェネレーションの狂気の再来の真相に近い事件だ。

だが、この事件に関しては、ネット上の無責任な情報を見るだけで、心が張り裂けそうになる。いままでの事件も、中傷や身勝手な推理で溢（あふ）れていた。情報を見ていると、痛ましさに襲われることもあった。

しかし、この事件だけは――

■

―10月24日―

　この日、私は学校を休み、家にいた。夜明かしをしたほかのみんなは、学校に出席している。昨日の、南沢泉里(みなみさわせんり)の襲撃未遂事件。追われることで限界を迎えた有村(ありむら)さんと、彼女を直接目にし恐慌に陥った結衣(ゆい)。二人の面倒を見るためだ。ひとまず生き延びたという安堵(あんど)、うきちゃんがいてくれることもあり、精神的にも肉体的にも負担は軽かった。

　まだあの偽の南沢泉里は確保されていない。それでも、次の事件が起こるであろう10月28日まではまだ余裕がある。後回しにしているだけとはいえ、久しぶりに心安らいでいた。

　だから、学校を早退してきた拓留が、最初結衣に何を言っているのか理解できなかった。

「なぁ、結衣？」

「ん？」

「昨夜のこと……あんまり思い出したくないと思うけどさ。有村と、そこにいる山添(やまぞえ)が……手に何か持っているのを見なかったか？」

　いったい、何を言っているの？。

「二人は、剣のようなものを持っていたんじゃないか？」

「剣……」

「ねぇ、拓留っ？　あなた、何を言っているのっ？　……結衣っ？　そんなの見てないわよねっ？」

　思わず、言葉が途切れ途切れになるほど、興奮してしまう。

「う、うんっ、見てないっ。知らないっ」
結衣は、嘘を付いていた。
拓留は、ディソードを出せるうきちゃんに頼み、事実をハッキリしようとする。
私はやめてと叫び、結衣を抱きしめていた。見て欲しくない。いや、見えてはいけないものなのだ。
無の空間から引き出される剣。うきちゃんがディラックの海より引き抜いたディソードを、結衣の目は追っていた。
「み、見えるの、結衣？」
「……」
「見えるのっ？」
もう、わかっているのに。いくら問いただしたって、覆せないことなのに。それなのに、私は……結衣は、目に涙を浮かべ、ゆっくりと頷いた。
「そ……そんな……そんなっ……」
おそらく拓留は、学校で思いついたのだろう。
なぜ、結衣が昨日、襲われそうになったのか。
一連の事件の犯人は能力者を狙っていた。ここまでわかれば、結論を出すのは簡単だった。
結衣は能力者で、昨夜、襲撃者は結衣を狙っていた。束の間の穏やかさは、大きな不安に替わっていた。

それから、私は明るくなった。結衣を怖がらせないように、明るく振る舞う。結衣も段々と、落ち着いてきた。結衣は、私たちが思っている以上に、大人で強い子だ。

能力についてざっと話し、結衣の話も聞いて。良かったことが二つあった。

まずおそらく、結衣の能力は結人（ゆうと）とのテレパシー。

「ユウが困っていると、声が聞こえる」

声に急かされ駆けつけてみれば、本当に結人が何らかの危機にあっている。弟思いの、結衣らしい能力だ。有村さんのような苦行も、自称・南沢泉里のような危険さも背負っていない。安全な能力だ。

そして、この場合発信側となる結人。結人にもディソードを見せて反応を確認したが、結人にはディソードは見えていなかった。結人は狙われない。私も拓留も、誰よりも結衣が安心した不幸中の幸いだった。

さらに、幸運……と呼べるものではないが、少なくとも家族がこれ以上、危機に晒（さら）されないような一報も入って来た。

それは、南沢泉里の死。自宅アパートで、彼女が焼死していた。

救われたという喜び、これで有耶無耶（うやむや）になったという暗い気持ち、南沢泉里として死ぬしかなかった女性への同情。さまざまな気持ちが一緒くたになって、私はどうしていいのかわからなかった。そんな、自分すらわからない私が選んだものは、人の同情につけ込んだ、事件の自然な風化と本当から目を逸らしての日常生活だった。

川原くんの、悲鳴混じりの懇願を聞いた私は、新聞部ではなく生徒会長として生徒会室につきっきりとなった。
ついこの間まではまるで逆の生活だった。山のように仕事はあるのに、なんだか笑えてきた。今日は10月28日。あの恐怖の一夜から五日、これより以前もほぼ休んでいたのだ。仕事が溜まっていて、当然だ。お陰で予定以上のノルマをこなすことができた。あと数日同じペースでこなせたら、新聞部にもまた顔を出せるようになるだろう。
そろそろ、冬の日が落ちる。誰か残っているだろうかと新聞部に顔を出してみたものの、部室には誰も……。
「香月」
「ん――?」
「すぐやめて帰りなさいとは言わないけど、せめて暗くなったら電気を点けなさい」
「ん――んー」
新聞部のPCで、ネットゲームのエンスー2をプレイしている香月。言葉を口にせず、わかり難いことこの上ない香月も、新聞部の一員としてニュージェネの再来に振り回される私たちに、随分と付き合ってくれた。ここで口うるさい母親のように、ゲームは一日一時間と言うのも恩知らずな話だ。
……でも、香月は協力しつつ、隙あらばゲームをしていた気もするけど。

何も変わらない部室、唯一変わっていたのは、壁のコルクボード。壁一面に貼られていた渋谷の地図が剝がされていた。
付箋や写真を貼り付け、最初は興味本位で、途中から自己防衛のために。みんなでニュージェネの再来に関する推理を出しあった地図。きっと、親友が死んだことになっている、私に気を使ってくれたのだろう。
でもこの地図がなくなったことは、どんな言葉よりも「終わった」という気分を抱かせてくれた。
立ち去る際、電気を消すのではなく、逆に電気をつける。
「じゃあね。香月」
「んー」
PCから目を離さぬまま、ブンブンと手を振ってくる香月。あの娘は、こういう娘だから、仕方ない。
ドアに手をかけたとき、外から壊さんばかりの勢いで、ドアが勝手に開いた。
「無事か！　来栖！」
「川原くん⁉」
部屋に入って来たのは、先ほど生徒会室で別れたはずの川原くんだった。
「ど、どうしたの？　そんなに慌てて」
「どうもこうもない！　大変なことになってる！」
とんでもない剣幕で、手にしたポケコンを見せてくる川原くん。

「何よ、これ……」
私は思わず、息を呑んだ。
警察が未だ公表していない、南沢泉里、杯田理子の名前がネット上に踊っている。
マンションの監視カメラの画像なんて、関係者である私でも見ていない。少数の真実の中に交じる嘘にデマ。@ちゃんねるの情報が確かならば、来栖乃々は殺人幇助で現在渋谷署に収監中らしい。
「んー!?」
川原くんの剣幕に当てられ、エンスーを止めた香月が、自身のPCで別の情報を拾い上げている。
そこには、電凸場所として青葉寮の住所と電話番号、私のスマホの番号までも晒されていた。
見た瞬間、ゾッとした。住所を晒されてしまうような情弱の行き着く先は、何度も拓留が一席ぶっていた。
「んーんー――」
香月が身振り手振りで、スマホの電源を切るよう、促してくる。スマホの電源を落としたのと、非通知着信がかかってきたのは、同時だった。
「誰が漏らしたのかはわからないが、同級生の誰かだろうな。俺はともかく、来栖に迷惑をかけるだなんて、何考えてやがる!」
ウェブ上では卒業アルバムの写真に、遠足のときに撮った来栖、川原、南沢の三人の写真が踊っている。
これをアップできるとしたら、当時の同級生ぐらいだ。

「それにしたって、南沢は死んだのに、なんでこんなことになってるんだよ！　ったく……死んでも、邪魔臭いヤツだ」
「川原くん、やめて。泉里は……私の友達だったんだから」
この同級生らしき書き込み、写真について「三人は親友で、いつも一緒にいた」と書かれている。でもこの発言は間違っている。来栖乃々と南沢泉里は、親友だった。川原くんと来栖乃々が友達なのも、きっと正しい。でも、川原くんと南沢泉里は、川原くんにとって泉里は、自分と乃々の間にいる邪魔者だった。
こうしてときに出る川原くんの本音は、とても悲しいものだった。

一緒に避難しようと誘ってきた川原くんの申し出を断り、私は家族の元へ、青葉寮に戻ることを決めた。顔を伏せ、早足で。道を歩く人の会話が、すべてこちらに向けたヒソヒソ話に聞こえて、煩わしかった。
「ちょっとスイマセン、あのお」
「急いでますんで」
青葉寮の近くで、マイクを持って声をかけてきたレポーターを振り切る。すでに青葉寮の周りには、マスコミが陣取っていた。さすがにプロを名乗るだけあって、素早い。
「乃々姉ぇ！」
青葉医院に入った途端、結衣が抱きついてきた。
「結衣、良かった……！」

「良かったのは、乃々姉えだよ！　大丈夫？　外の人にイジメられなかった⁉」
「いくら百戦錬磨の連中でも、女帝をイジめるのは無理じゃねえかなあ」
「父さん？」
「冗談だよ。お帰り、乃々」
「お、お帰りなさい」
「ほっ……」
　結衣の後ろには、父さんと結人とうきちゃんがいた。どうやら全員、外のマスコミに捕まることはなかったらしい。拓留はおそらくトレーラーハウスだ。事件も解決したとのことで、拓留は宮下公園に戻ってしまったのだが、今となってはそれが幸いしている。
「人の噂も七十五日たあ言うが、こんなんが一カ月以上続いたらたまらんなあ」
「ごめんなさい」
「ん？　ああ、いや、気にするな。お前は悪くねえよ。面倒臭えんでこっちも電話線ごと切っちまったから連絡できねえけど、そのうち拓留も戻ってくんだろ」
「拓留兄は〝じょうきょう〟だから。すぐ聞きつけて、戻ってくるよ！」
「どうかしら？　あの子も、意外と重要なトコ、抜けてるから」
「ちがいねえ」
「あうあう」

みんなで朗らかに笑う。うきちゃんだけが、この調子に慣れてなくて、おどおどしていた。
こう言いつつも、拓留が戻ってくるのを、全員信じていた。みんな空元気だろうけど、こうやって明るい空気が作れるんだから、いい家族だ。
こんないい家族を危険に晒してしまった。何やら、蘇(よみがえ)ってきた過ちが、私の背にのしかかっている気がした。

父さんの、家族みんなの予想どおりに、拓留は世莉架(せりか)を連れて帰ってきた。
「……大丈夫か、来栖?」
「心配して来てくれたの?　ありがとう」
「ああ。伊藤(いとう)も来るってさ」
困ったときの友達。世莉架も伊藤くんも、ウチの全員が顔見知りで馴染んでいる。得体の知れない、大多数の人間が興味本位でジロジロみているいま、信頼できる人間が身近にいることは、それだけで有り難い。
励ましてくれる拓留。人の噂も七十五日だと、父さんと似たようなことを言う。でも、私の心配は、私に被害が及ぶことではなく……
「私の大切な人たちや……大切な青葉寮に迷惑がかかるのが許せない」
「乃々姉え!　平気だよ!　私なら全然、平気!」

「ぼ、僕も大丈夫だから！」
　リビングで悩む私の声を聞き、キッチンから飛び出してきた結衣と結人（ゆうと）が、両側から私にすがりついてきた。気丈な結衣だけでなく、普段自分を押し隠し気味な結人まで。二人の励ましを聞くうちに、涙が出てきた。
「……ごめん。ごめんね……」
「どうして乃々姉が謝るの⁉」
「何も悪いことしてないのに！」
「そうだよ。謝ることないよ、のんちゃん」
　二人だけでなく、世莉架も私を励ましてくれる。
　そんな中、拓留だけが、妙に刺々しい雰囲気だった。
「ああ、くそっ。全然わからないっ」
　荒い声が、私たちだけでなく、キッチンのうきちゃんまで驚いている。
「タク？」
「ど、どうしたの？」
　拓留は、私たちを手で制すと、スマホをいじりながら廊下（ろうか）に出る。誰かに、電話をかけるつもりらしい。
「……こうして塞ぎこんでいるのも、良くないわよね。洗濯物でも畳（たた）もうかしら」
「のんちゃん、私も手伝っていい？」

世莉架が申し出てくれる。
「じゃあ私とユウは、下のお掃除手伝ってくる」
結衣があたりまえのようにそう言うと、
「僕も？」と少し不満そうに結人がつぶやいた。
「ユウ？　アンタ、うきちゃんや乃々姉の下着、見たいの？」
「わ、わかったよ。僕も下に行くよ」
姉の攻撃に結人があっさり降参する。
「わ、私も行きます！」
二人にうきちゃんも続いた。
家事や手伝いのため、三々五々に散らばるみんな。そうだ。ただ座っているだけじゃ、落ち込むだけだ。世莉架に手伝ってもらって、父さんの大きな白衣を二人がかりで畳んでいると、拓留が部屋に戻って来た。
「何かしていないと、つい悪いことばかり考えてしまって……どうしたの？」
拓留の顔は、先ほどの私の落ち込みが軽く見えるほどに、蒼白となっていた。思わず、作り笑顔を引っ込めてしまうほどに。
「結衣たちは、どうした？」
「うきちゃんと一緒に、佐久間先生のお手伝い。今日はもう医院を閉めるんだって、お掃除をしに行ったよ」

「そ、そっか……」
　拓留の顔色が若干良くなる。おそらく原因は先程の電話だろうけど、いったい誰にかけたんだろう。
「尾上。来栖のこと頼む。何があっても絶対にそばを離れないでやってくれ。絶対にだぞ」
「う？　あ、うん！」
「ねえ、拓留？　何かあったのなら、教えて——」
「後でちゃんと話すから。とにかく任せたぞ、尾上」
「おっけい！」
　詳しいことは何も言わず、拓留は勝手に人を任せて下に降りていった。
「タク、どうしたんだろうね？」
「さあ……？」
　世莉架と一緒に悩んでいるのもつかの間、寮の中をバタバタと走る足音。拓留が、慌てた様子で結衣の名を呼んでいる。結衣に、何かあったんだろうか。私と世莉架の足は、自然と下に向かっていた。
　一階に行くと、先程よりずっと落ち着いている拓留が、誰かに電話をかけていた。
「何があったの？」
「それが……」
　うきちゃんの説明によると、結衣が寮から出て、外に行ってしまった。でも一人ではなく、伊藤くんが付き添っているとか。私たちが上にいるうちに、伊藤くんが来ていたらしい。

「結衣と伊藤くんが……？」
「どこ行っちゃったんだろう？」
こんなときに、いったいどこへ。世莉架の疑問は、当然だった。
「もしもし、伊藤か!?」
あっさりと繋がる電話。どうやら拓留の心配は、杞憂のようだった――

■

私とユウは、地震でみんなをなくした。震災当日、離れ離れだった私たちは、とてもひどい目にあった。
私は男の人が怖くなり、ユウは一人ぼっちと暗い所が怖くなった。
警察の人や消防署の人に助けられて、ユウと再会できたとき、ユウはなにも言わず、私の手を握ってきた。いや、私のほうから手を伸ばしたのかもしれない。
ユウは泣いていた。私も泣いていた。
この日から、私たち姉弟は、互いの手が離せなくなった。
両親も死に、親戚もいない。行くあてのない私たちに斡旋されたのは、身寄りのない子供を引き取ってくれる施設、青葉寮だった。11月の地震から、一カ月ちょっと。まだまだ、あの日のことが夢に出て、よく眠

れなかった。
「まあなんだ。左うちわとは行かねえが、それなりに不自由はさせねえからよ」
照れくささを笑いで隠す、大きなおじさん。男の人が怖い私でも、なんか平気。大きな熊のぬいぐるみみたいで、怖さとはむすびつかない。
青葉寮の主で、青葉医院の経営者である佐久間先生。怖くはないけど、声の大きさにビックリした。ユウも思わず、私の後ろに隠れる。身体も大きいけど、声も大きい人だ。
「父さん。もうちょっと声のボリュームを落として。二人とも、怖がってるじゃない」
「お、おう、すまねえ」
佐久間先生をたしなめる、制服姿のお姉さん。高校生までいかない、中学生ぐらい……だと思う。栗色の髪の、綺麗な人だった。綺麗なのに、ほほえみは優しい。身体もなんか、ボッキュンボンになりそうだし。ずるい。
「……」
「ユウ？」
「な、なんでもないよ」
ユウの顔が、まっかだった。この、おませさんめ。ちょっとだけ元気になった弟、うれしいけど、姉としては心中複雑だ。
「あの」

「なあに?」
「お姉さんは、先生の子どもなんですか?」
「んー……合ってるような、合ってないような」
だっていま、父さんってよんでたのに?
「私は来栖乃々。あなたたちと同じで、青葉寮に引き取られたの。だから、父さんと血の繋がりはないわ」
「……ですよね」
「オイ。俺と乃々をわかりやすく見比べるんじゃねえよ」
「ふふ。でもほら、先生や佐久間さんって呼ぶより、父さんって呼んだほうがいいかなって。これから、私たちは家族になるんだから」
「かぞく……?」
私たちが失ったもの。私とユウだけになってしまったもの。たぶん、このお姉さんも失ったんだ。それでもこの人は、もう一度家族を作ろうと、私たちをその輪に入れてくれようとしている。
「い、いいの?」
「いいのよ」
きょとんとするユウの質問に、お姉さん……乃々姉は、曇り一つない笑顔で応えた。

青葉寮に、孤児ではなく家族として迎えられた私たち。この四人で、新しい生活がはじまるんだと思っていたら、もう一人お兄さんがやって来た。ただしくは、青葉寮ではなく下の青葉医院に、入院患者としてだけど。

宮代拓留。私たちと一緒で、震災で家族を失った人。この人が青葉医院に来たとき、私は怖かった。父さんと違い、乃々姉とほぼ同い年のこの人は、あの怖い人たちと年齢が近い。

でも、怖かったのは初めて見たときだけだった。だって、拓留さんは、目を閉じたままずっと動かなかったんだから。

昏睡状態のまま、動かない拓留さん。食事も排泄もままならない拓留さんの世話をしたのは、乃々姉だった。父さんのお手伝いをしていた乃々姉は、一生懸命に動かない人のお世話をしていた。そして、ズボラな父さんに代わり、家事まで。乃々姉はお姉さんで、お母さんでもあった。

どうしてそんなにがんばれるの？　一度聞いてみたことがある。

「だって、ほっとけないじゃない」

乃々姉の答えは、簡単だった。こんな簡単さで、かいがいしく働ける。乃々姉は、すごい人だった。

乃々姉とは違うけど、すごい人はもう一人いた。

「ねえ、タク元気？」

「元気だけど、起きてはいないよ」

「そっかー」

ほぼ毎日、こんなやり取りをしている。それだけこの人は、拓留さんのお見舞いに来ていた。
拓留さんの幼馴染みの、世莉架さん。この人は、拓留さんが青葉医院に運ばれてから、患者以上に通ってきている。動かない拓留さんの脇で、とりとめのないことを話しかけながら、たまに頬を撫でたりして。
「タクは幼馴染みだし、私の恩人なんだよ」
いったいどういう関係なんですか？　と世莉架さんに聞いてみたら、こんな感じだった。もっと、つっこんだ関係なんじゃないかと思ってた。でも、あの震災の日、世莉架さんは拓留さんのお陰で、生き延びたらしい。それでも、こんなに毎日通ってくるのはすごいことだ。震災からそろそろ一年、みんな震災のことを忘れようとしていた。
よいことも、わるいことも。
だからこうやって、ずっと忘れないでお見舞に来るのは、すごい。
乃々姉も世莉架さんとはすぐに仲良くなって、友達になっていた。
「タク起きないねー」
ある日のこと、世莉架さんはこんなことを口にした後、用事があって下に来た私を、ジーっと見ていた。
「な、何？」
「んー……ひょっとして、とうかこうかんってヤツなのかな」
「とうかこうかん？」

「昔、タクから聞いたんだけど……えーっと、同じくらいのものをとっかえっこすることかな。タクは地震の前から……あまり家族には恵まれなかったの。それなのに、目を覚ましたら、可愛い（かわい）お姉ちゃんや妹に弟が待ってるんでしょ。起きないのは、不幸の先払いなのかなーって」

可愛いお姉ちゃんや妹や弟……まだこの人のことはよく知らないけど、私たち家族の中での、お兄ちゃんになるのかな。拓留兄さん……。

「拓留兄い？」

思わず、口から呼び名が漏れていた。

「おっけい。その呼び方、きっとタクも喜ぶよ」

「よろこぶかな」

「よろこぶよー」

世莉架さんに励まされると、なんでもおっけいな気がする。すごいと言うより、不思議な人なのかもしれない。

それから数日後、拓留兄いは目を覚ました。乃々姉の喜びようが忘れられない。駆け付けた世莉架さんも喜んではいたけど、自分が立ち会えなかったのがちょっぴり悔しそうだった。

「なんだよその呼び方。馴れ馴れしいな」

拓留兄いは、私に初めてこう呼ばれて、ぶすっとした。あまり、喜んでないよね、これ。

拓留兄いは目をさました。でも、眠っていた身体は、動き方をわすれていた。
ベッドから、まったく動けない拓留兄い。起きるどころか、指一本すら動かない。
拓留兄いが目を覚ました日の夜。青葉寮に、苦しそうな泣き声がひびいた。一緒の部屋で寝ている私とユウが、思わず乃々姉の部屋に駆け込むぐらいに。声は、ひさびさに聞く、感情の籠（こ）もった怖い泣き声だった。
　乃々姉は、部屋に駆け込んだ私たちを抱きしめてくれた。震えがなくなったところで、優しく話しかけてくる。
「あの声は、怖い声じゃないわ。宮代くん……ううん、拓留の声よ」
「僕たちを驚かせてるの？」
「違うわ。拓留は、悔しくてしょうがないのよ。せっかく起きたのに、身体一つ動かせない。その上、自分が知らないうちに、いろいろ変わって戸惑っている。眠る前と変わらない人、世莉架がいなければ、きっともっと混乱していたわ」
　みんな、震災前のことを忘れようとしている。そんな中、拓留兄は震災直後から帰ってきたようなものだ。竜宮城から帰ってきた浦島太郎のように、世界の変わり具合に、自分のいない間に家族が死んだことに戸惑っている。
「ごめんね。しばらく、我慢して欲しいの。リハビリをすれば動けるようになるって、父さんも言っていたし……拓留の面倒は、また私が見るから」

私も男の人は苦手だし、ユウもまだ見知らぬ人な拓留兄いにおびえている。仕事で忙しい父さんの代わりに、拓留兄いの面倒を見れるのは乃々姉しかいなかった。
「ごめんね。乃々姉」
「別に、謝らなくてもいいのよ。拓留もこれからは、家族なんだし。弟の面倒を見るのは、姉として当然のこと。これ、結衣から学んだのよ?」
「私から?」
「私も一人っ子だったしね。ユウの面倒を見る結衣は、お姉ちゃんの先輩。これからも後輩として、いろいろ学ばせてもらうわ」
ちょっとイタズラめいてはいたが、乃々姉に先輩と呼ばれるのは、うれしくてくすぐったかった。
でも、次の日から、乃々姉のお姉さんっぷりは、私より上であることを思い知る。
拓留兄は、振り幅の大きい人だった。上手くいかなくて怒ったり落ち込んだり、あと、おしゃべりなので、口はすごくよく動く。リハビリに付き合ってる、乃々姉は大変そうだった。今の拓留兄は一人で寝返りもうてない。食事やトイレのお世話も、意識を取り戻した結果、逆に大変になっていた。同い年の女の子に、食事はともかくトイレの世話をしてもらうことを、受け入れるのは大変だと思う。
私だって、ユウのわがままに困ったことはある。でもそれは、おんなじ家に生まれてずっと一緒に育ってきて、当たり前だったからで。とても、今の乃々姉のようには振る舞えない。

私もユウも、拓留兄の近くに行くことを、なんとなく避けていた。悪い人じゃないけど、難しい人。付き合い方が、私たちにはわからなかった。

確か、二人で洗い物をしていたとき。私はスポンジ担当で、ユウがふきんの担当。お手伝いにもだいぶ慣れてきたときに、その音はした。

どんがらがっしゃーん！

何かを倒したようなすごい音がして、思わずスポンジを投げてしまう。

「わわわ！」

ユウの投げたお皿を、なんとかキャッチする。キッチンが泡だらけになったものの、お皿みたいな取り返しの付かないものは無事だった。

「危なかったあ」

「お姉ちゃん、いまの音って」

おそらく、拓留兄が寝ている部屋からだ。私たちは、急いで部屋に向かう。あの部屋には危ないものも多い。何か変なことがあったら、確認してすぐに報告すること。父さんにも乃々姉にも言われていた。

半開きになっているドアから、中を覗く。

「お姉ちゃん？」

「しーっ」

付いて来たユウに、静かにしてと合図する。

すでに拓留兄の部屋には、乃々姉がいた。
「あなた、動けたじゃない」
　ベッドから転げ落ちた拓留兄を、乃々姉が抱きしめていた。拓留兄の頭を、自分の胸にギューッと。拓留兄は、肩を震わせていた。
　拓留兄は、自分でベッドから落ちたのだ。それはつまり、寝返りを打った。動けるようになったということだ。乃々姉の努力がむくわれた。それだけじゃない、拓留兄も、乃々姉の努力に応えたんだ。
　どうすればいいのかわからない。でも、いまの二人を邪魔するのは悪いのはわかる。
　動かない私とユウ。たぶん、意識していなかったんだと思う。ユウは私と手を繋ごうとしていた。
　私はユウの手を両手で握りしめる。いつもと違う握り方に、ユウは驚いていた。
「私たちも、このままじゃいけないと思う」
「お姉ちゃん?」
「進級したら、私は中学校に行くけど、ユウはまだ小学校。いままでみたいに一緒にいれないし、イジメられてても、すぐに助けに行けないの」
「そんな……嫌だよ」
　私だって嫌だ。ユウが心配だし、何よりこっちも怖い。私だって、ユウに頼っているのだ。
「でも、先に進まなきゃ……でないと、二人ともダメになっちゃう」

私の目は、自然と乃々姉と拓留兄に注がれていた。ユウも私の目を見て、何を言いたいのか、気づいてくれた。

あの二人みたいに、前を向いて、良くなることを信じてなきゃいけない。姉の先輩として、後輩には負けていられない。

ユウの手に自然と力が籠（こ）もる。ユウの中の男の子が、頑張っていた。

「おーい、キッチンが泡だらけなんだけどよ。誰かいねえのかー？」

父さんののんきな声が、ちょっとだけ耳障りだった。

一度動けるようになったら、拓留兄いの回復は早かった。ほぼ一年で、普通に動けるようになった拓留兄い。保健室登校だったけど、中学もちゃんと卒業して、ちょっと理屈っぽい普通の高校生になった。

私もユウも、ちょっとだけ成長した。私も一人で街を歩けるようになったし、眠るときや夜は厳しいけど、ユウも一人でいれる時間が増えた。

みんなが歩み寄れるようになって、拓留兄いも家族の一員になった。私も、碧朋学園の中等部に入学。拓留兄いと乃々姉が作った新聞部の人たちとも、仲良くなって。

私たちは、みんなでまっすぐ、未来に向かって歩いていた。

■

―10月28日―

ずっとこのまま続くと思っていた、家族の関係。でも、拓留兄いが乃々姉や父さんと喧嘩して、青葉寮を出て行ってから、この関係はちょっとだけ変わってしまった。

それから、半年、ずっと拓留兄いの掃除当番を引き受けて。

ここ最近は、乃々姉が刺されて、また拓留兄が青葉寮に戻ってくるようになったけど、家族どころじゃないんだよ！　な態度にちょっぴり傷ついて。

それで、六年前にお別れしたうきちゃんが、昔のまんまで青葉寮の家族になって。喜んでいたら、知らないお姉さんに襲われそうになって。

いろいろあったんだなあ……思い出が、たくさん蘇ってくる。

お姉ちゃん！　お姉ちゃん！　どこ!?　どこなの!?

久々に、ここにいないユウの言葉が聞こえた。

遠いところにいても、ユウの声が聞こえる。そういう能力があるって言われても、最近ユウの声を聞くことはあまりなかった。

ユウも、私に頼り切りにならないよう頑張ってるんだ。

私は、ずっとユウを信じてるからね。

なんで、一方通行なんだろうな。最後くらい私の言葉も、ユウに届けばいいのに。

先に進む足と繋ぐための腕も、もう無い。叫ぶ元気も望んでいた未来も、かき消えて。

ぐいっと力が入れられ、にぶすぎる刃が私の喉仏(のどぼとけ)を潰したところで、私の思い出も全部、ノイズになって消えてった――

■

「まったく、こんなときにお前は！」

ホッとした拓留の様子が、張り詰めていた空気を和らげる。

でも、それも一瞬だった。拓留は、何度も結衣の名前を連呼し、伊藤くんを問い詰めている。時折、電話から聞こえてくる、悲鳴のような声。唐突に止む音。電話を切ったのではなく、切られた。拓留は何度も電話をかけ直そうとするが、繋がる様子はなかった。

「た、拓留ッ？　結衣がどうかしたの……ッ？」

私たちは当然拓留に何があったのかを聞く。拓留は、何も答えなかった。答えぬまま、洗面台に頭を突っ込み、嘔吐(おうと)した。内臓まで吐き出すつもりなのかと、心配するぐらい長く長く吐き続けて。

「来栖ッ、電話だッ。神成(しんじょう)さんに、とにかく電話してくれッ」

吐き終えた拓留は、絶え絶えな声のまま、私に頼み事をしてきた。

「え？」

「このままじゃ、結衣がっ！　殺されるっ!!」
身体中の血が、サアッと引いていった。
先程からの拓留の焦燥と、結衣がいない事実が、最悪の形で結びついた瞬間だった。

私の返事を聞かず、飛び出した拓留。誰もが、あり得ない最悪の事態を考え、動けなくなる。
「お姉ちゃん、どうしたの……？」
呆然とした結人の声が、私たちを現実に引き戻してくれた。予想は予想、予感は予感。まだそこに至ってないかもしれない。まだ、間に合うかもしれない――
「い、急いで宮代さんを追わないと……！」
飛び出そうとするうきちゃんの肩を摑み、神成さん宛にダイヤルしたスマホを無理やり押し付ける。
「うきちゃん、神成さんにこのこと、お話して？　お話が終わったら、結人と一緒にここに」
「で、でも……」
「お願いね。うきちゃん」
私の語気に気圧(けお)され、頷くうきちゃん。他人のお願いを断れないうきちゃんの優しさを、思わず利用してしまった。
でも、能力者のうきちゃんを、この状況で外に出すわけにはいかない。それに、うきちゃんを行かせることは、さらなる悲劇に繫がる。なぜかそんな予感が、頭をよぎった。

「世莉架。二人をしっかり見ていて」
「う、うん！　のんちゃんは？」
「私は、拓留を追いかけてみる」
「私もタクを！」
「ごめん世莉架。せめて父さんが戻って来るまでは、お願い！」
　先ほどの拓留に負けない勢いで、私も鍵が開いていた非常口から外に飛び出す。
　先ほど、しつこい記者を怒鳴りつけに外に出ていた父さんが、目の前に立ちふさがる。拓留の勢いが退けたのか、たむろする記者たちは何が何だかと狼狽えていた。
「おい！　何があったんだ!?」
「父さん、中に戻ってあげて……ッ」
「お、おう。お前は？」
　父さんの返事を聞くや否や、私は飛び出していた。記者たちの人垣の切れ目、思わず目を向けている場所、そこが拓留の向かった方向だと、アタリを付けて。
　張り裂けそうな肺、ばくんばくんと弾け飛びそうな心臓。無理やり身体のSOSを押さえつけて、私は走り続ける。
　終わって欲しいと願っていた。
　だから、終わったという雰囲気を、作り笑顔で受け入れてしまった。

欺瞞と嘘がまだ残っているのに。
「結衣！　伊藤！　どこだーっ！」
拓留の叫び声が、聞こえた。迂回してきたのか、声は意外と近くから聞こえてきた。行く宛のなかった走りに、一つの目標が生まれた。
青葉寮からそんなに離れていない、空き家が目立つ区域。復興著しい渋谷で、後回しにされた一画だ。この震災を忘れられない場所からは自然と人の足も遠のき、被災者の怨霊が集まっているだの夜中に一人歩いているとさらわれるだの、バカらしい話がたくさん出回っている場所だ。
拓留は、そんな場所で立ち尽くしていた。同じくらい、いや、それ以上に虚ろな、伊藤くんを前にして。
「い、伊藤くんっ？　何をしているの……っ」
息を整え、改めて伊藤くんを見たところで、異変に気づいた。
伊藤くんは血まみれだった。制服の、顔の、至るところが血で染まっている。その手には、赤い、怖ろしい量の血を浴びたであろうナイフがあった。
守らなきゃ──
自然と、足が動き、拓留と伊藤くんの間に割って入る。
ぴちゃりと、粘っこい水溜まりを踏みつける。とても、生臭くて、いけない気分になる水溜まり。
私の目に入って来たのは、綺麗な包装紙でラッピングされた、たくさんの箱だった。水溜まりの、赤い水溜まりの源は、まるで人の身体を模しているかのように綺麗に並べられた、たくさんの四角い箱からだっ

た。正方形に長方形、まるで人の部位を、切り取ってそのままラッピングしたような――
「こ、これ……何……拓留……？」
　拓留は何も答えなかった。
「ゆ……結衣は……どうしたの？　ねえっ!?　結衣は!?」
「うっ……くっ……！」
　ようやく拓留の口から、声らしきものが漏れる。そんな言葉にならぬ声の代わりに、涙が溢（あふ）れ出ていた。
　涙なんか、止めて欲しい。ただ一言、違うと言ってくれれば……！
「ああ、ほら、気を付けなよ副部長。その箱、ひとつでも踏み潰したら、結衣ちゃんを組み立てられなくなる」
　伊藤くんは、いつもと変わらぬ明るさで、私がまったく待ち望んでいない答えを口にした。
　この箱の中身、押し込められたモノは。
　私は嘘であることを必死に願いながら、手近な箱を手にする。
　中につめ込まれた何かに、私は見覚えがあった。
　何度も繋ぎ。何度も感謝して。ずっと見続けてきた、結衣の手だった。
　嘘でも冗談でもない、これは真実だ。絶望が目の前にある。
「ど……どうして……どうしてぇ……っ？」

「全部、宮代が悪いんだよ。南沢泉里を苦しめたから、その復讐さ」
「……泉里の……ふく、しゅう……？」
　いったい、何を言っているのだろう。
「そうだよ。泉里はもっと痛かったろう。苦しかったろう。しかも、実験がつらくて死にたいと思っても死ねなかった。結衣ちゃんなんて、まだ幸せだよ。こうしてすぐ死ぬことができたんだからね」
「貴様ぁぁ――っ！」
　拓留が、伊藤くんに飛びかかろうとする。でも伊藤くんは、わかっていたのだろう。彼はただ、突っ込んでくる拓留の首めがけ、ナイフを突き出すだけだった。
　このままだと、拓留も――死ぬ――
「うあああああああ！」
　私は感情のままに、伊藤くんに飛びかかった。
「来栖っ!!」
「殺させないっ！　拓留は、私が殺させないっ！」
　拓留を恨み苦しんで死んだ南沢泉里の復讐なんて、ありもしないものに、これ以上家族を殺されてたまるもんか！
　私の激昂（げっこう）は、予想していなかったのだろう。伊藤くんと私は、結衣の血だまりの中でもつれ合う。ただ本能のままに、伊藤くんにしがみつく。伊藤くんは私を振り払おうとして、まだ痛みの残る私の脇腹の傷を

殴ってきた。
苦悶（くもん）の声が出てくるが、すぐに飲み込む。この程度の痛みじゃ、全然足りない。傷に手を突っ込まれて、内臓をえぐり出されたって足りない。いや、私はもう、絶対に足りることなんてない。
「この野郎ォォォッ！」
拓留も、伊藤くんに飛びかかる。二対一でもつれ合った結果、伊藤くんの指が砕け、ナイフが転がり落ちた。拓留はナイフを蹴飛ばすと、私の代わりに伊藤くんを強引に押さえつけた。
一度離されたことで、疲れや痛みが戻って来る。拓留の問いかけにも応えることができないくらい、私は息を荒げていた。
激昂の次に来たのは、悲しみ。結衣の死だけではない。いまこの場にある悲しみは、もっと大きい。
「副部長。恨むんなら宮代を恨むんだなァ。あのとき、こいつが泉里を見捨てていなければ、俺だってこんな事件を起こすこともなかった」
「すべての事件の元凶は宮代だったんだ」
伊藤くんは、拓留をあざ笑いつつ、ニュージェネの狂気の再来は、全部自分が泉里のために起こしていたのだと告白する。
でも、それは全部。
「……。嘘」
「ああ？」

「来、栖……？」
「……嘘よ。伊藤くんの言ってることは、みんなでたらめじゃない」
憤怒が、再び開いた腹の傷の痛みも、すべて押しのけてしまう。
「あなたは、誰っ!?　伊藤くんにこんなことをさせて！　どこかで私たちを嘲笑っているのは、いったい誰なのっっ!?　見てるのはわかってるのよっ!!　私の大切な妹をこんな姿にしたあなたは、いったい誰ッ!?」
「ど、どういうことだ、来栖っ？」
「伊藤くんは、泉里のことなんて知らない！　誰かに、そう思い込まされているだけ！」
「はあ!?　何言ってんだよ！　俺は、大好きだった泉里のために復讐を――」
そんな本当が、あるはずもない。泉里が好きだったどころか、泉里と伊藤くんの間には一面識すらない。そんなに思ってくれる人がいたら、どれだけ救われていたことか。
でたらめの思い出や愛を叫び続ける伊藤くん。私は、南沢泉里の親友としての立場で、彼の嘘を否定し続ける。
「ち、違う、違う違う、違う違う違うーっ!!」
半狂乱の伊藤くんは、狂った様に叫び、拓留を跳ね飛ばした。
返り血ではなく当人の血。伊藤くんの目から、血が流れていた。口からは泡を撒き散らし、両目は流れる血ごと眼球をこぼれ落としてしまいそうな程に膨れ上がっている。
「あああああぁ！　痛い痛い痛い！」

血が出るほどに激しく頭をかきむしり、伊藤くんは自分の頭をアスファルトの地面に何度も叩きつける。割れた頭から流れた血が、飛沫となり飛び散る。
「や、やめろ、おいっ！」
「ダメよ、伊藤くん！」
　あまりの暴走を前に、私と拓留は伊藤くんを押さえにかかる。犯人としてではなく、被害者として、友人として。
「放せぇ、宮代ォォ！　俺は泉里が見捨てたお前が許せないぃぃ！　だって俺は泉里の事を——泉里!?　泉里って誰だ!?　南沢泉里？　そうだ、犯人だ！　宮代を狙った殺人犯！」
　伊藤くんは、笑いながら支離滅裂なことを叫び続ける。伊藤くんに植え付けられた嘘が、彼を殺そうとしていた。泉里への愛を叫びつつ恨みを口に、拓留を責めつつ自分のせいだと理解して、結衣を殺したことを誇りつつ後悔して。ひとしきり、笑い叫んだ後、伊藤くんはブレーカーが落ちた家電のように、唐突に卒倒した。
　伊藤くんを二人がかりで抑えていた拓留と私は、伊藤くんの重さに引きずられ、地面に座り込んでしまう。
　悪い夢を見ているようだった。いやきっと、これは夢なのだ。だって、こんなこと、あり得ない。きっと目が覚めたら、結衣も結人の手を引いて起きてきて、学校に行ったら部室で拓留と伊藤くんがいつも通りはしゃいでいて。

でも、何度も目をこすっても消えない箱詰めの結衣が、これが全部夢なんて都合のいい話を許してくれなかった。
「ゆ……結衣……ゆい……っ……う、ううっ、うあああぁぁぁぁ！」
慟哭（どうこく）する。涙がボロボロとこぼれ、叫ばずにはいられない。
「乃々姉。もっとみんなに頼ってもいいんだよ？　拓留兄も、乃々姉が思うより大人なんだし」
涙の向こうに、優しげに笑う結衣が見えた気がした。

■

――11月3日――

気付けば、大粒の涙が目から溢れていた。ただ、部室にあった、結衣の写真を見つけただけなのに。それだけで、悲しみで胸が張り裂けそうになる。
結衣を失ったあの日から、私は何度も結衣を探している。私は、毎晩夢の中で渋谷を走り回っていて、最後には――必ず、あの箱を手にする。
多少展開が違えども、結末は同じ。大切な妹が親しい友人に殺される。夢ですら、私は悲劇を回避できない。目が覚めた後、心が蝕（むしば）まれているのを自覚し、また夜を迎えるのだ。

私は後悔と悲しみで作られた迷宮より、抜け出せなくなっていた。私だけではなく、父さんも拓留も結人もうきちゃんも、きっとこの迷宮に囚われている。私はおそらく永遠に、生きている限り彷徨（さまよ）い続け、泣き続けるのだ。

第八章　真相に辿り着く受難

―11月1日―

結衣（ゆい）の死から、四日。
火葬場の煙は、白く、高く、どこまでも昇って行く。あの煙の行く先は、きっと天国だ。
私と拓留（たくる）は斎場の外で、荼毘（だび）に付された結衣の魂（たましい）を見送っていた。
事情聴取に検死、役所への申請に葬儀（そうぎ）会社とのやりとり。渋谷地震のときは、オートメーションのように流された葬儀、初体験の虚しい忙しさ。でもおかげで、現実的な悲しみから、一歩退くことができた。泣くのも、毎晩眠る前だけで済んだ。
「私って、きっと薄情なんだわ……」
「いや。来栖（くるす）以外にそういうのを仕切れる人がいないからだよ。父さんも、気が抜けたみたいになっちゃってるし……」
こう言いつつ、拓留はずっと私を支え続けていてくれた。トレーラーハウスに戻ることなく、青葉寮にずっといてくれる。結衣が消え、拓留も消えていたら、私は耐えられなかっただろう。

第九章　彼女にとっての本当

——9月1日——

宮代拓留（みやしろたくる）はトレーラーハウスに関わる手続きのため、急いで下校した。

来栖乃々（くるすのの）は生徒会の用事で外に出掛けている。そしてそのまま帰宅する気だ。

香月華（かづきはな）は、今日がエンパイア・スウィーパー・オンライン2のメンテナンスの日であるため、部室に来る理由がない。

新聞部にいるのは、何も知らずに誰かが来るのを待っている伊藤真二（いとうしんじ）だけだった。今日は部活がないという伝言を担ったのはほかならぬ私なのだから、彼が知るはずもない。

「ったく、見捨てられたかと思ったぜ。尾上（おのえ）よぉ、宮代たち、どこ行ったんだ？」

「んーわかんない。どうしたんだろうね？」

俺以外のヤツが来て良かったとばかりに話しかけてくる、伊藤真二。私は椅子（いす）にだらしなく腰かける伊藤真二に歩み寄る。自然と、彼を見下ろす形になった。

「休むなら言って欲しいもんだぜ。まー、わかるけどなー。宮代が家を出て行ってから、宮代も副部長も、妙によそよそしいもんなあ。きっとよそよそしさが、カチ合ったんだぜ」

「んー、私としては、タクとのんちゃん、仲良くして欲しいんだけどなあ」

私はさも連絡するとばかりにスマートフォンを取り出し、電話ではなく画像を呼び出し、伊藤真二の前に突きつけた。

「ん？　へー」

感心をしている。きっと、宮代にこんな顔ができたんだと、思っているのだろう。見せた写真は、宮代拓留が青葉寮で一緒に住む人間と撮った集合写真。どうしょうもない汚物を混ぜていながらも、宮代拓留は満面の笑みを浮かべていた。

その笑みとは対象的な笑み、浮かべていた無害そうな笑みをかなぐり捨て、私は口端を歪めた、嫌な笑みを浮かべる。笑いではなく、嗤（わら）いを。

「この子を、殺せ」

トントンと、指先で写真を叩く。殺す相手は橘結衣（たちばなゆい）だ。伊藤真二には来たる10月28日に、橘結衣を惨殺してもらわねばならない。

伊藤真二は、何度も私と写真を見比べる。冗談だろ？　ふざけるな！　口には出さないものの、伊藤真二の思考が流れ込んでくる。予想や予測ではない、私は相手の思考が読めるのだ。私はさらなる嗤いを

浮かべる。伊藤真二は驚いた顔のまま何も言わない。その理由はいつも違う私に、恐怖と不気味さを感じているからだ。

「ヒィ……！」

限界を迎えた伊藤真二は、椅子から転げ落ち、慌てて部室から出ようとする。だが、私の共犯者がすでに部屋にいる。

伊藤真二の正気は、喪われた。

■

――9月7日――

この日が、はじまりの日だ。

ニュージェネレーションの狂気に見劣りしない事件。狂気の再来となるのであれば、ミステリアス、それに条件付けがあったほうがいい。六年前の事件と日付を合わせるのは、既定路線だった。

オートロックのマンション、適当な住人に中から鍵を開けさせ、私たちはスムーズに目的の部屋の前に到達した。

トン、トントン、トン……。

「大谷さん、私です。突然すいません」

宮代拓留といつも一緒にいる尾上世莉架に近い声。まったく面識のない相手だが、感情のない私本来の声よりも、この声のほうが、望ましい。

返事を無視し、中の人間が自ら開けるまで、何度もドアを叩き、話しかけ続ける。

ドアの向こうの気配が、こちらに近づいて来た。あと、一押しだ。

「私です。こんな遅い時間に申し訳ありません」

「はいはい、いま開けます。どちら様ですか」

ドアが開き、大谷悠馬が顔を覗かせた。

「私です。覚えてませんか」

眉をひそめ、不審そうにこちらを観察してくる、大谷悠馬。

当たり前だ。覚えているはずがない。私たちは二人とも、彼とは初対面だ。

「あんたら、どこのどなた――」

人造の剣が能力を発揮する。大谷はこめかみを押さえ、その場に崩れた。記憶を書き換えることは、脳に直接作用する。いまはもう、それが当たり前となった杯田理子や渡部智昭や伊藤真二だって、最初は同じように苦しんだ。彼らとは違い、大谷悠馬の思考誘導は、この一回で終わる予定だが。

「大谷さん、大丈夫ですか?」

心配するふりをして、呻く大谷の顔を覗き込む。

「あ、ああ……。大丈夫。最近、たまにあるんだ」

「疲れが溜まってるんじゃないですか？　あまり、無理しないほうが」
「……相変わらず心配症だなお前は。大丈夫だよ。さ、入ってくれ」
　大谷悠馬の中で、私たちは古くからの友人となった。彼に案内され、私は部屋に入る。
「そうだ、せっかくきてもらったのにすまん、生放送中なんだよ」
「気にしなくていいですよ」
　大谷は包丁を持つと、自らの右腕を切り刻みはじめた。彼の目には、自分の腕がチーズに見えている。包丁が骨にかかると、のこぎりのように前後に引き、切れずに苛立（いらだ）ち、何度も刃を叩く。それでも彼の目には、チーズに見えている。当然、痛みは感じていない。
　私はゲロカエルんストラップを弄（いじ）りつつ、血塗れの腕と格闘する哀れな男を見守る。
「……ふざけんなよ！」
　巧く切れず、大谷悠馬が憤（いきどお）っている。
「手伝いますよ」
　これ以上は、生放送に支障がある。私は使い慣れた自分専用の『包丁』を虚無より手にすると、彼のチーズを切り分けはじめた。
「こつがあるんですよ」
　単に力を込めるのではない。肉は引き切り、骨は力いっぱい断ち、やわらかな関節を切り取り線とする。何度も切っていればわかること。幸い私は、コツを知っていた。

「仕事、順調みたいですね」
友達ぶって、気楽な世間話を装う。大谷はこちらの話以上の夢や希望を語りはじめた。ニコニヤ生放送以上に、口が回っている。大多数に喋るのではなく、信頼できる人間ともっと話したい。彼の本音が伝わって来る。だが残念ながら、私に抱いている信頼は、妄想の産物だ。
「はい、終わりました」
「悪いな、手伝わせて」
皿に盛られた、切り刻まれ自分の腕を持ち、大谷悠馬は彼の職場でありステージもであるPCの前に向かう。まだ痛みはないだろう。だが、出血量からして、あと持って数分か。生命活動に支障が出れば、思考誘導の効果も切れる。
「もーしわけない！　この安売りしていたチーズがあり得ないくらい固くて」
大谷は、ウケるキャラを装い、実況をはじめる。一言二言喋り、チーズという名の肉片を口にしたところで、彼は呻きはじめた。失血死ではなく、ショック死もあり得る。
カメラの前で、散々に死をアピールした後、大谷悠馬は自らの役割を果たし、動かなくなった。
なるべく音を立てず、ドアに向かう。
「お邪魔しました」
最後の日常らしい演出を残し、私たちは部屋の外へ。そのまま、マンションを後にする。中から出る分には、オートロックは楽だ。

「いやあ、上手くいったなあ。オイ」

ずっと、大谷悠馬の死を見つめていた共犯者が嬉しそうにしていた。いい年の大人が、妙な機械を背負い、漫画みたいな大剣を手にしている姿は滑稽でしかない。しかし、このバカみたいな姿が、私の計画には必要だった。正確には、この機械が可能にしている、思考誘導の能力が必要なのだ。

「ネットの生放送だ。ネット中毒なアイツは、きっとすぐ食いつくぜ？　あーでも、もう一人ぐらい殺らないとダメだな。でないと、面白さが足りねえからなあ」

元ギガロマニアックスの研究者であり、現在は青葉医院の医院長である佐久間亘は、楽しそうに今後の計画を語る。

佐久間は六年前まで『委員会』と呼ばれる強大な組織の末端のさらなる末端で働いていた。佐久間の研究は、渋谷地震と公に呼ばれる最終実験サードメルトの発生と、そこから生ずる野望と脅威に立ち向かった一人のギガロマニアックスにより、終わりを迎えた。委員会はギガロマニアックスから手を引き、佐久間は組織ごと見捨てられた。

しかし佐久間は、その後も仲間たちとほそぼそと終わったはずの研究にしがみついていた。私は計画のために彼に接触し、仲間に引き込んだ。

この男の本性は、真の快楽主義者だ。楽しそうだから、私の計画に協力する。楽しそうだから、猟奇的な死に方を考案する。楽しそうだから、自分を親として慕う青葉寮の子供たちを巻き込むことに躊躇しない。

率直に言えば、この男はクズだ。でもこのクズさが、計画の彩りに必要だった。宮代拓留を事件に惹きつけるほどの猟奇性の演出に。

これからはじまる『ニュージェネの狂気の再来』は、解ける事件でなければいけない。事件を追いつつ、見えない敵に追い詰められて行き、汚名を被るものの、最後にラスボスを倒し大逆転。

これが、宮代拓留のために私が用意した筋書きであり、宮代拓留の英雄願望を満たす一大イベントだ。

六年前の『ニュージェネレーションの狂気』で追い詰められ汚名を被り、自ら名誉挽回を果たした一人の少年。彼のような真の特別な存在に、宮代拓留はなりたいのだ。

望むのならば。用意するしかない。

私は子供の頃から、ずっと宮代拓留とともにいた。

育児放棄されていた宮代より悲惨な養育環境で。

語りたがりの宮代よりものを知らず。

宮代よりも勇気がなく、それでいて困ったときは手を差し伸べる強さを持つ。

都合のいい、想像上の友達、イマジナリーフレンド。それが、尾上世莉架。私の正体だ。単なる想像上の友達は、六年前に肉体を得た。

地震で顕になった、見下していた周りの正しさと自身の無力さ。現実に追い詰められた宮代拓留は、ギガロマニアックスとして、妄想でしかなかった私を現実化した。

本物のギガロマニアックスの能力は、未来が見えるとか感情が操れるとか嘘が見抜けるとか、そんな生易しいものではない。本物のギガロマニアックスは、神同然。万能の力を持つ。
宮代拓留以外の能力者は、所詮——
「次はいつだっけか?」
別れる寸前、佐久間はどうでもいいことを聞いてきた。
「9月19日だ」
「結構間があるなあ。忘れねえようにしねえと。年取るとよお、物覚えが悪りいんだよ」
戯れ言を。お前が、楽しみを忘れるものか。
「ああそうだ。一つ聞こうと思ってたんだ」
「なんだ?」
「お前の計画だと、伊藤だの結衣だの乃々だの巻き込むけどよ、これどうなんだろうなあ。あんまり追い詰めすぎると、アイツ、壊れちまうぜ」
佐久間は、息子や娘や知人の心配ではなく、自分のオモチャが壊れることだけを恐れていた。
「親代わりを気取るくせに、見積もりが甘いな。宮代拓留なら、乗り越えられる障害だ。むしろこれぐらいの悲劇を用意しなければ、満ち足りない」
「恋人盗られそうだから嫉妬してるくせに、よく言うぜ」
「……なんの話だ?」

「あーはいはい。次回までにもっとおもしれえこと、考えとくよ。お前の彼氏を満足させるためにな」

手をひらひらと振り、かの下衆は立ち去っていった。

大谷悠馬の死で、ゲームははじまった。

やりたいこと、願うこと、楽しいこと。これからどう転んでも、宮代拓留の願いは叶えられる。彼は、タクは、特別な存在になれるのだ――

第十章　彼女たちにとっての破綻

―11月3日―

犯人を知った私は、自分の部屋で手紙を書きはじめた。あれだけ悩んでいたのが嘘と思えるくらいに、真実と伝えたいことを織り交ぜて。初めから、この気持ちでいれば良かったのだ。早くにそうしていれば、きっと……。

この家族へ宛てた手紙を拓留(たくる)が読むのは、すべてが終わった後の話だ。できることなら、読まれるようなことになりたくない、置き手紙だ。

ぐるりと部屋を見回す。数年間、この部屋で寝起きした。さまざまなものが、愛おしい。まったくのゼロからはじまった、青葉寮での生活。家具も小物も、その配置も。全部自分で選んだものだ。できればすべて、このままであって欲しい。

手は机の引き出しのさらに奥、私以外はたとえ机を壊してもわからないような所にある、記憶の残骸を引き出していた。私のスマホにデータとして残っている、来栖乃々(くるすのの)、川原雅司(かわはらまさし)、南沢泉里(みなみさわせんり)、三人の写真だ。データと違うのは、南沢泉里の顔がサインペンで、恨みを感じさせるほど黒く塗りつぶされていることだ。

この写真を誰かが見たら、きっとまた来栖乃々と南沢泉里に関する謎が増えてしまう。このまま切り刻もうと、ハサミで挟んだところで思い直し、写真は元の場所ではなく、誰かが探せば見つけられそうな、ベッドの下に挟み込んだ。

誰かがこの写真を見つけ、不思議に思い、謎を明らかにする、それでも、いいのだ。この真実は、手紙に遺すこともできなかったんだから――

「お世話になりました」

制服に着替え、一礼し部屋を出る。そのままこっそりと、誰にも会わないようにして、青葉寮を出た。きっと、誰かの顔を見ただけで、決心が鈍り、すがってしまう。

外に出てからしばらく、何度も振動するスマホを無視し、私は終わらせるための場所に向かった。

不自然なほど人がいない休日の碧朋学園。私はじっと、新聞部の部室で世莉架からの連絡を待つ。きっとあの娘が連絡してくるのは、深夜になってからだ。まだ日付は、11月3日。ニュージェネレーションの狂気における最後の事件『DQNパズル』が起こったのが11月4日だ。だからきっと、いや必ず私と会うのは、日付が変わった後、もしくは変わる直前だ。

それにしても、なぜ自分は、もう一つの馴染みのある部屋、生徒会室に足を運ぼうと思わなかったのだろう。この部屋では。拓留やほかのみんなが、思い当たって来てしまうかもしれないのに。

きっと、生徒会室は女帝来栖乃々の居場所で、ここは私が私のままで過ごしてきた場所なんだろうと思い至る。
たとえばあの『乃々の天然水』なんてふざけて書かれたダンボール。なんであんなことが書かれているのか、そもそも中身はなんだったのか。まったく思い出せないが、不思議と気に障ることはなかった。アレに言及したとき、愉快なやり取りがあったのは覚えている。
あんな思い出は、生徒会室にはない。私はここで、自分自身の思い出に包まれたかったのだ。私は、部室をぐるりと見回す。それだけで思い出が、ニュージェネレーションの再来の悪夢が、家族を失った哀しみが、徐々に蘇(よみがえ)ってきた。

■

――11月4日――

月の光が、無人のベンチを照らしている。誰もいない深夜の屋上。この隔絶された世界で、私は世莉架と向き合っていた。何度も悩んだ、それでも私は、家族を守るために、拓留のためにも、こうすることを選んだ。
「――のんちゃん?」

屋上にやって来た世莉架は、いつもと変わらぬ顔をしていた。深夜の学校の屋上にという、とてつもなく不自然な呼び出しだというのに。それだけ、呼び出した私を信頼してくれているのか。それとも、これも織り込み済みなのか。

「本当に悪かったわね、こんな所に呼び出して」

すでにはじまっている。なのに一瞬詰まってしまった。もう、振り切るしかないのに。

「――ね、尾上（おのえ）」

いつもと違う呼び方。私は家族以外、名前で呼ばない。それだけ気を許した親友を、私はそうすることで切り捨てた。

そして、世莉架を問い質す。

第一の事件の現場にいたこと。なぜ結衣（ゆい）を殺したのか。八年前の病院の地下に、あなたは本当にいたのか。何を聞いても、世莉架は答えなかった。ビクビクとして、困惑している様子で、いつもの彼女がおそらくするであろう反応だ。

まだ戻れるんじゃないの？

脳内で響く、私の声。でも、甘えをすり潰す。最後の手段を使うしかない。

両腕を高く振りかざし、拝礼のように手を組み合わせる。両手の間に感じる、不確かで確実な感触。私は六年ぶりに、剣を引き出した。

私は、ディソードを持つ能力者で、本当はずっとディソードが見えていた。

恐慌に落ちいった有村さんが剣を振り回したときも、拓留に言われうきちゃんが剣を出したときも、私の目には彼女たちのディソードが見えていた。これも、拓留についていた、嘘の一つだ。でもお陰でこうして、私にも狙われる資格ができた。
両手を組み合わせたような形で、下に伸びていく鋭利な刃。なんとも奇っ怪な形をした私のディソード。間違った祈りは凶器となる、そんなことを示しているような剣。
私は、世莉架めがけ振り下ろした。
「……！」
世莉架はしっかりと見て、一歩退いて避けた。反射的な回避。
一つの答えが出た。
「……やっぱり……そうなのね……？」
世莉架は無言のままだった。だが、さっきまでの表情がスウッと消えていく。月光に照らされた、無慈悲な夜の女王。太陽のようにポカポカとした見せかけの世莉架とは真逆の、月のように冷たい光が似合う尾上世莉架がいた。
世莉架の目は、私のディソードを見た後、私自身を射抜いてきた。人のすべてを見透かしている目。これが彼女の、思考盗撮——
「あなたよね!?　南沢泉里を使っていたのは！」
「——お前に言われたくはないよ、来栖乃々」

のんちゃんという呼び名は、掻き消えていた。

ゾッとする声色。世莉架の口から出ている声とは思えないほど硬質で冷たい声。

世莉架の手に顕現(けんげん)する、鋭く長く禍々(まがまが)しい刃。毒花の花弁のような剣、おもわず見とれるほどに美しい、世莉架のディソード。

世莉架との距離が、一気に詰まる。彼女は、剣を振るい跳んでいた。六年ぶりに剣を取り出した私とは違い、彼女はディソードを武器として使い慣れていた。

世莉架のディソードの切っ先が、私の肩を掠(かす)めた。

「ちぃ!?」

怯まぬ世莉架の連撃を、私は必死で捌(さば)く。世莉架のディソードに比べ、変な形をした私のディソード。でもこの大きな持ち手が、幸い盾代わりとなり、おかげで私は、なんとか世莉架の猛攻を凌(しの)げていた。

でもあくまで、凌いでいるだけだ。世莉架は剣を使い慣れているうえに、考えが読める。こちらの手札だけをオープンにして、ババ抜きをしているようなものだ。なんて、不公平な。

「そう言えば、宮代にはまだ話してないんだな、このまがいものめ。だったら私が、いまここでぶちまけてやろ――」

「尾上ぇぇ――っ!」

あの物言い、世莉架は、私のすべてを読んでいる。思わず激昂し襲いかかる。世莉架は余裕綽々(しゃくしゃく)で私の刃を受け止め、結果剣を挟んでのにらみ合いとなった。

『お前の死は宮代拓留をゲームから降りかねさせない。だが、殺したことに気づかれなければいい』
　世莉架の声が、脳内に響く。彼女の口は動いていない。これは、まさか――
『このゲームは、宮代拓留のしたいことだ』
　間違いない。世莉架の思考が、ディソードを通し、私に逆流している。
　尾上世莉架という少女の真実と、彼女の計画が突如明らかになる。あまりにも信じられない、荒唐無稽な拓留のためのゲーム。あまりにバカげている。そんなことのために、ここほどの凶行を産んだとは。
「いつもいつも、面倒くさい女だと思っていたが……ディソードまで鬱陶しいな」
　上から目線で言う世莉架。
「あなたこそ……困ったディソードを持っているみたいね」
　真実を突きつけたくなるのは、当然だった。
　私のディソードを介し、世莉架の思考が逆流してきている。あなたのことは、全部わかった。私に言われ、事実を悟った世莉架は衝動的に飛び退いた。
「そんな、バカな……」
　冷徹な世莉架の本性に、初めてヒビが入った。
　彼女は、矛盾している。
　拓留のためにゲームを仕組み、伊藤くんに結衣を殺させ、今日ここで私も殺す気だ。だが、そんなこと、拓留は望んでいない。

世莉架の中で、拓留のためのゲームが、自分自身のためのゲーム。自身の存在価値と復讐のためのゲームになっていた。
世莉架しか頼るもののいなかった、昔の拓留。だが拓留は、私たち家族や伊藤くんとの出会いで、世莉架以外の人にも心を許すようになり、世莉架の存在価値は脅かされるようになった。少なくとも、世莉架はそう信じ込んだ。
だから、世莉架は、青葉寮から外に出て隙のできた拓留の渇望を理由とし、拓留を特別とするためのゲームを開始した。自分の存在価値を脅かす者を排除し、拓留を自分だけのものとする、我欲と情愛、二つが入り混じった矛盾のゲームを。
「黙れよ……この大嘘つきのフェイクがぁ!」
再びはじまる斬り合い。思考盗撮の逆流を恐れているのか、世莉架の攻撃は距離を取ったものになり、そのため刃が何度もぶつかり、火花を散らす展開になった。
火花の中に、映像が見えた。これは、世莉架の思考ではない。
映像の中で、拓留と〝彼女〟は、来栖乃々の墓に花を捧げていた。
あり得ない映像は、更に続く。あり得ないのに、これはあり得る未来なのだとわかってしまう。ディソード同士の相互作用による、未来の可能性。そうとしか思えなかった。

■

――11月6日――

　震災当日から六年経ち、復興の区切りとされた大イベント、渋谷平和復興祭当日。数万の人々が駅前に集う中、拓留は不自然に人のいない渋谷ヒカリヲの劇場にて、もう一人の犯人と対峙していた。

「このクソガキ!!」

「―――!」

　拓留がいいように傷めつけられている。痛めつけているのは世莉架ではない。世莉架は対峙する二人のそばに横たわっており、ピクリとも動いていない。

「んなことなら、最初から『拷問室』にでも思考誘導しとくべきだったな!　なんなら、今、やってやろうか!?　現実で……よぉ!!」

「ぐあああああ――っ!」

　先ほど、世莉架の心を垣間見たときにわからなかった共犯者の正体。それは、私たちや結衣が父さんと呼ぶ人、佐久間亘。父さんが能力者だったなんて思えない。でも、あの背負っている機械と、ケーブルで繋がっているディソードに似た剣は、持ち主に能力者同然の力を与えていた。

思考誘導を使い、伊藤くんたちを無茶苦茶にした世莉架の共犯者は、父さん。いや、佐久間だったんだ。結衣が死んだとき、これ以上の最悪は無いと思っていたのに。現実は、容易に私の感情を、乗り越えた。

「ぐぅううう――っ！」

「ふん……だめだな。痛覚からの発狂じゃあ、なんにも新しいもんは得られねえか」

佐久間は拓留を、まるで実験動物のように扱っていた。

私は、あんな男を、医者として父として、慕っていたのか――！

「……なら。あいつらを、お前の目の前で殺してみるか。たぶんまだ、渋谷を出てねえだろ？」

「うっ……うあああああ！」

「おお、それでいいんだよ！　お前にとって、それが大事なモノであればあるほど……効果は高ぇから――な！」

佐久間は拓留に背を向け、劇場の外に出ようとする。だが、その寸前。

「絶対にっ、させるか――――っ!!」

現実にある物として出現した拓留のディソードが、背を向ける佐久間の背中めがけ、一直線に飛翔した。

「なにぃぃっ!?」

佐久間が振り返る間もなく、拓留のディソードは、佐久間の延髄から喉を貫いた。倒れた佐久間は、血を吐き出しつつ絶命する。拓留の執念が、佐久間の快楽に勝った。拓留はきっと、みんなの仇を取った。きっと、賞賛すべきことなんだろう。

それでも私は、こんな家族が殺しあう光景なんて、見たくなかった。例え、一方が家族に値しない人間だったとしても。

■

――11月4日――

目の前に迫る世莉架のディソードを、慌てて弾く。垣間見た真実は、私の動きを鈍らせるのに十分だった。世莉架の攻撃は、まったく止まない。きっと世莉架には、この未来が見えていないのだろう。だって今私が見ているのは、尾上世莉架と宮代拓留、二人が迎えるであろう結末なのだから――

■

――11月6日――

佐久間を倒した拓留。最後、拓留の前に立ちふさがった……いや。すべてを拓留のあずかり知らぬところで終わらせ、自分が望んだエンディングを迎えさせようとしたのは、起き上がってきた世莉架だった。

〝尾上。お願いだから、僕にやりたいことを与えてよ。それを、叶えさせてよ――〟

自らが、震災後、イマジナリーフレンドに願ってしまったこと。封印していた事実を思い出した拓留は、世莉架の用意したエンディングを、真っ向から否定した。

「……『こっちみんな』の大谷が死んだのも、『音漏れたん』の高柳が死んだのも、有村の知り合いだった柿田が死んだのも、ネット記者の渡部が死んだのも、南沢泉理に見せかけられた杯田が死んだのも、伊藤が操られて結衣を殺したのも、――が死んだのも！」

結衣の次の死者。私がまだ見ぬ死者の名前だけ、かすれて聞き取れなかった。

「全部、僕のせいなのかよ！」

拓留は泣いていた。

「違う！　私がやったことだ！」

言い返す世莉架も泣いていた。

「そうだ、お前がやった！　僕が、お前にやらせたんだっ！」

「違うって言ってるだろ⁉」

「久野里さんの言ったとおりだ。僕のまわりで、事件に関する出来事が起きすぎてる。当然だよな！　僕が解決するために仕組まれた事件なんだから！」

すべてを知った拓留は、世莉架の用意したベストエンド以外の道を、進もうとしていた。
力づくでも、その道は選ばせない。激昂する世莉架に戦いを挑む拓留。
今、現実で私が苦戦しているように、他人の心が読めるという世莉架の能力は強力すぎた。世莉架は拓留の考えをすべて読み、真正面から叩き潰してしまう。
「そのまま大人しく眠るといい。そろそろ警察がここに来る」
「う……く……はぁっ……」
世莉架に敗れ、呻く拓留。
「大丈夫。目が覚めて時間が経てば……お前は、必ず気がつく。自分が何を望んでいるのか」
自分が何を望んでいるのか。この甘えてしまいたい誘いが、逆に拓留を奮起させた。自らの妄想により、多数のディソード召喚による乱射を実現。たとえ心が読めても対処できない攻撃により、拓留は世莉架をも討ち果たした。
拓留は動けぬ世莉架めがけ、ディソードを振りかざした。
「そのまま大人しく眠るといい。そろそろ警察がここに来る」
「う……く……はぁっ……」
呻くのは拓留ではなく世莉架だ。
「大丈夫。目が覚めて時間が経てば……お前は、必ず気がつく。自分が何を望んでいるのか」

先ほど、聞いたばかりのような会話と状況。大きく違うのは、動けぬ世莉架に逆転する手段はないことだ。思考盗撮の能力も、拓留がこれから何をしようとしているのか、本人にわかってしまうだけだった。

「やめて……タク……私から目的を奪わないで！　生まれてから、いろんな人の心を読んできた！　みんな悩んで、迷ってる！　それでも生きてるのが信じられない！　なんで笑ったりできるのっ？　それが何のためか、自分でわかってないのに！　私は！　そっちに──普通になんか、なりたくないよぅ……！」

彼女は怪物で、人形。そう思っていたのに、こうして叫ぶ世莉架は、まるで──

「……だめだ。お前は、普通の女の子になるんだ」

「……やめて……お願い……お願いだから……ずっと私に、タクを助けさせてよぉっ……！」

「それじゃあ……さよなら」

「タク───っ！」

拓留のディソードが、世莉架めがけ振り下ろされた。

■

──**11月4日**──

拓留がディソードを振り下ろしたところで、幻視はプツンと消えた。私は目の前にいる今の尾上を見据える。彼女の刃に曇りはない。きっと世莉架には、未来が垣間見えていない。わかっていたら、あんな冷徹な

顔のままでは、流石にいられまい。
「私は、どうしたらいいのよ――！」
信頼していた父親への失望、目の前の殺人者と拓留の決して消えぬ繋がり、予測できる自身の未来。いらだちが力となり、襲い来る世莉架のディソードを、大きく弾いた。
「!?」
世莉架も驚いている。困惑混じりの怒りが直接流れ込んだのか、それともあまりの唐突さに思考盗撮が追いつかなかったのか。とにかく、チャンスだった。
体勢が崩れた世莉架めがけ、私は一直線に襲いかかる。ようやくできた、攻撃のチャンス。そしておそらく、最後のチャンス。私は未だに剣撃の火花が残る距離を一気に詰め……。
一瞬、今まで見ていたヒカリヲの未来より、もっと先の未来を、目撃してしまった。
驚きは、私の足を止めるのに十分すぎて――
世莉架のディソードの刃が、唐突な幻視に動揺する私の胸を、貫いていた。
こちらは、現実だ。手の中から自身のディソードが、虚無となり掻き消えた。
倒れる私を、世莉架が見下ろしている。月光が影を作り、その表情はうかがい知れない。
「来栖っ！　尾上っ！」
聞こえたのは、拓留の声だった。拓留は、屋上に来てしまったのだ。
「……逃げて……！」

うつろな目で、必死に叫ぶ。しかし、拓留らしい足音は、どんどんと近づいてくる。マズい、このままでは。だがそれよりもっと早く、近くから別の足音が去って行く。尾上は逃げ出していた。当然だ。世莉架が拓留を、殺すはずがない。なら、逃げるしかない。

目からは安堵（あんど）の涙が、胸からは終末の血が、いいように溢（あふ）れ出ている。結局私が迎えたのは、お似合いの結末だった。

最初から、私はギガロマニアックスで、私は本当は――なんだと言っていれば、結衣を守れたかもしれないのに。結末は、変わっていたのかもしれないのに。

「来栖ッ！」

拓留に、こんな顔をさせないで済んだかもしれないのに。

喉が、内臓から湧き出てきた血で詰まりそうになる。慌てた様子の拓留が、私の頭を横に向かせる。重力に従い、私の口から吐き出される血。

拓留は、いろいろなことを知っているね。

頭を撫でて褒（ほ）めてあげたいのに、手も足も満足に動かない。

「……た……く……」

「しゃべるな！　大丈夫！　大丈夫だから……」

本当に、あなたは嘘つきね。私の、次に。

最期の力で、私は傷を押さえてくれている拓留の手を取る。

「だめだ！　傷を押さえてないと！」
　もう、無理よ。だから最期だけ、わがままを許して欲しい。
　拓留の震える指先を、私の唇（くちびる）に押し付ける。ああそうか、私は拓留を家族と思っていたけど、本当はこういうことが——
「そんなのだめだ！　絶対にだめだ！　だめだっ！」
「ご、め…………ね」
　まとも謝ることさえできないなんて、私はなんて、だめなんだろう。
「……乃々？　おい……乃々？　起きろよ、乃々！」
　拓留は、ちゃんと私の名前を、呼んでくれているのに。長かった、一度呼ばれなくなってから、本当に長かった。
　でも——どうせなら——本当の——だって私は——あなたのことが——

第十一章　結末は、静かにはじまる

それは、とても不快な告白だった。

「僕がこの事件を起こしたのは、僕のせいではありません。この社会そのものが、害悪に満ちているからです——」

自分がニュージェネの狂気の再来、すべての主犯だと告白している拓留。有名人だった大谷や高柳や渡部を殺し、一般人である柿田は練習として殺し、自分の友だちに無理やり義理の妹を殺させて、最期には姉代わりの女性をも殺害した。

得意げな顔で、社会への挑戦だなんてありきたりな動機を拓留が偉そうに語っている。この趣味の悪い嘘は、誰の仕業なのか。思考誘導で私に見せているのか。それとも拓留に言わせているのか。

拓留は被害者だ。犯人は尾上世莉架と佐久間亘。なのに拓留は、自分が犯人だと語り続けている。しかも余程注目を浴びたいのか、時折妙なフラッシュ、強烈な光が目を襲ってくる——

■

――２０１６年　３月28日――

「お、起きたかも……？」

　この光は、随分前に浴びた記憶がある。

「かもじゃないわよ！　反応してる！　うき、急いで久野里さん、呼んできて！　看護師さんでもいいから、早く！」

　看護師さん……ああそうだ、数年前、病院の地下で、何度も浴びせられた光によく似ている。でもあそこには、看護師さんなんていなかった。

「よ、呼んできました！」

「まったく。お前ら、いつになったらナースコールを覚えるんだ！」

　誰かの怒鳴り声が聞こえ、目の前が光で包まれる。光の正体は、見たことのない謎の絵画、知らないロールシャッハの図案だった。

　かちゃりと、頭に付けられていた器具が外される。見知らぬ天井。私の身体は、ベッドに横たえられていた。地獄って、罪人にベッドをくれるような優しい場所なんだろうか。

「起きたか。正直、半分諦めかけていたが……おい。私が誰だかわかるか？」

　目の前の、碧朋の制服の上に白衣を羽織った女性が、こちらを睨みつけている。

「……鬼？」

「ぶふぅー！」
ヒクリと頬を引きつらせる女性の脇で、金髪のツインテールを結った少女が吹き出した。
「し、失礼ですよ。有村さん」
眼鏡をかけた、サイドテールの幼い娘が、年上であろう少女をたしなめている。なんだろう、みんな見覚えがあるような。
「笑うの、失礼かも」
これまた眼鏡をかけたショートカットの彼女が喋った瞬間、驚きが一気に私の頭を揺り起こした。
「香月!?　あなた、喋って!?」
いままで「んー」だけで意思疎通をしていた香月が、普通に喋っていた。初めて聞く彼女の声は、最高の目覚ましだった。
こくりと頷く香月の隣にいるのはうきちゃん、順に並ぶのは有村さんに久野里さん。新聞部の仲間や家族や、とにかく事件に関わったみんなが、私のベッドを囲んでいた。
「どうやら。起きたときの混濁から、完全に意識を取り戻したようだな」
久野里さんは手早く、私の頭や身体に付けられたコード類を外していく。その手つきは、まるで医者だった。私が知る彼女は、作業に仁なんて入る余地のない、研究者だったのに。
「ここは……」

「AH総合病院です」
　有村さんが、事も無げに言った。
「え？」
　ビクンと、身体が震えた。
「ああもう、地下も閉鎖されて、職員も入れ替わってるんで。あなたは、去年の11月4日、碧朋学園の屋上で刺されて、ここに担ぎ込まれたんです。それから、数カ月、寝ていたんですよ。重態でしたからね」
「そんな」
　あのとき私は、世莉架に刺されて、死んだのだと思っていた。
「あと数センチずれていたら、死んでただろう。偶然か奇跡か、それとも誰かが奇跡が起こることを、妄想したのか」
　妄想……能力……ギガロマニアックス⁉
「拓留は！　いやそれより、あの後、事件は、どうなったんです⁉」
　ここに、拓留はいなかった。いま、有村さんは、去年の11月と言った。それから数カ月。つまり今は、２０１６年。
「順を追って話したいところだが、まずハッキリさせておかねばならないことがある」
「えーと、そうですね……私、嘘がわからなくなっちゃいました」
　さらっと有村さんは、凄いことを口にした。

「嘘がわからなくなったって、能力がなくなったってこと？」
「そうですね。あと、ディソードも見えません。私だけじゃなくて、うきもです。どうもあの地震で能力を持っちゃった人は、ギガロマニアックスじゃなかったみたいです。私たち、ニセモノの持っているものだったんですよ」
うきちゃんも、有村さんの隣で頷いている。なぜか一緒に香月まで頷いていた。
確かに、私が以前小耳に挟んだ、神の如きギガロマニアックスと、一つの能力しか持たない有村さんとは、少し違うなとは思っていた。
渋谷地震で能力を得た者は、その能力を失っている。
思わず目を見開き、自分の身体を確認する。数カ月寝ていたことを差し引いても、手足も身体も細く、胸もお尻も小さくなって、貧相になっている。背も縮んでいた。
「……すみません。鏡、貸してもらえますか？」
使うことを、わかっていたのだろう。うきちゃんがスムーズに手鏡を、こちらに手渡してくれた。上半身だけ起き上がらせ、私は手鏡を覗き込んだ。
鏡に映るのは、きらびやかな来栖乃々(くるすのの)とは似ても似つかない、暗い目と地味な顔を持った少女だ。髪だって色素が抜け、艶(つや)やかだった乃々の亜麻色の髪とは全然違う。
「それで、あなたは結局、誰なんですか？」
有村さんは、私のことをずっとあなたと呼んでいた。

私は――私は……っ。

「私は……南沢泉里（みなみさわせんり）です」

私は自分の本当の名前を告げた。

渋谷地震で死亡した、来栖乃々という瓜子姫（うりこひめ）の皮を被った、小狡い天邪鬼（あまのじゃく）。それが私の正体だ。

■

渋谷地震より、数年前。

とある宗教にハマっていた母親に連れられ、私、南沢泉里はＡＨ総合病院の地下にあった施設に通うこととなった。この病院は、母親が信仰する宗教団体が経営していたのだ。

結果、何らかの素養が見受けられた私は、ギガロマニアックスという神になるため、拷問の如き過酷な実験を受け続けることになった。

初めは反対していた父親も、あっさり私を見捨てた。小学校でも日に日に陰鬱（いんうつ）になり、妖しい手術痕や注射の痕を残した私を、みんな避けだした。こうして私はみんなに見捨てられた。

「ねえ。あなた、一人なの？　それなら、私と一緒に遊ばない？」

唯一、南沢泉里を人間として見捨てなかったのが、当時すでにクラスの中で一番の人気者だった来栖乃々だった。

乃々ちゃんは、私を友達として扱ってくれた。別の人と遊んでいるときも、私を輪の中に入れるように工夫してくれた。みんなが私を煙たがっても、乃々ちゃんは心からの善意で、私を親友として扱ってくれた。

そして、渋谷地震が起こったあの日。病院からの帰り道の途中だった私は、震災に巻き込まれたものの大きな怪我を負うことはなかった。母の死を目撃し、父の死を告げ実験動物である私を回収しに来た病院の人から逃げ出して。渋谷を必死に走る私は、親友の死を目撃することとなってしまった

瓦礫（がれき）に潰され、泣いていた乃々ちゃん。私は必死に助けようとしたが、子供一人の力でどうにかなるものではなかった。乃々ちゃんは次第に動かなくなり、私は本当のひとりぼっちになった。

なんで、嫌われ者の私が生き残って、みんなに愛されている乃々ちゃんが死んでしまったのか。私は世の中の理不尽さが恨めしかった。

「どうせ死ぬなら……私が死ねばよかったんだ……乃々ちゃんの代わりに……私が……私が死んでしまえばよかったんだ！」

私は願いを、そのまま口に出した。

白い光に包まれ、ディソードを初めて目にしたのは、そのときだった。

私を追ってきた病院の人に無視され、水たまりで自分の顔を覗き込んだとき、異変に気がついた。私は、突如覚醒（かくせい）した能力により、憧（あこが）れの来栖乃々に『変身』していたのだ。

私は乃々ちゃんになってしまった。でも南沢泉里ではなく、来栖乃々ならば、幸せが手にできるのでは。酷く残酷な考えに支配された私は、乃々ちゃんの身体（からだ）を、焼いてしまった。自分が恐ろしいことをしていると気づいたときには、もう遅かった。

乃々ちゃんは、南沢泉里として葬（ほうむ）られた。彼女が泉里であると証言したのは、引き返せなくなった私、つまり偽物の来栖乃々だ。私の嘘は、この日このときからはじまった。

来栖乃々として入院した私の元には、生き残った同級生がたくさんお見舞いにやって来た。記憶の混濁、ショック状態、さまざまな言い訳がある状態で、私は来栖乃々であることを貫きとおした。来栖乃々に向けられる同級生の顔は、決して南沢泉里には向けられないものだった。

幸せになれる。気まずさを感じつつも、その思いに流されていた私は、あるときふと気づく。

来栖乃々は、どんな女の子だったか。

前向きで明るく、それでいて優しいのが来栖乃々という女の子だ。私は、私のまま生きるわけにはいかない。

私は、必死に来栖乃々を思い出し、彼女らしく生きることに務めた。乃々ちゃんなら、きっとこう動くだろう。乃々ちゃんなら、引き受けるはずだ。私は幸せと引き換えに、自分自身を失おうとしていた。

青葉寮に引き取られ、結衣（ゆい）や結人（ゆうと）相手に優しい姉を演じていたとき、転機となる少年が青葉寮にやって来た。

震災前、病院の地下で一度目にした、男の子だ。成長してはいるが、目の前で眠る少年は、あのときの面影を残していた。
気づいた瞬間、血の気が引いた。あのとき私は「助けて」と言った。そこで逃げ出した少年に、見捨てられた怒りや恨みなどはなかった。子供一人に、何ができるのか。いまはとうに、現実的な視点を持っている。
私は、恐れていたのだ。南沢泉里としての私と、あの地の底にいた南沢泉里を見た少年を。葬ってしまった何かが蘇(よみがえ)るような感覚。
(君。あの病院にいなかったっけ?)
いまや、姿形変わった私にかけられるはずもない言葉。そもそも彼には意識すらない。なのに、怖くて仕方なかった。
私は宮代拓留の世話を自ら買って出た。彼から目を離すのが、怖くて仕方なかったからだ。
宮代拓留が目を覚ますまでに、一年かかった。彼が目を開けたとき、なぜか私は嬉しかった。自分のしていたことが報われたと。寝る直前に気がついた。目を覚ませば、自分に都合が悪くなる可能性があるのに、いま素直に喜んでいる。
どうにも不思議だったが、私は自然と、そのまま宮代拓留のリハビリを手伝うこととなった。
寝返りも満足に打てない自分自身の情けなさに宮代拓留は憤っていた。自然と、近くにいる私に当たる回数も多くなる。宥(なだ)め、誤魔化(ごまか)し、あしらい。いままで乃々ちゃんのふりをして築き上げたものすべてを

使って、私は彼を応援し続けた。でもリハビリの効果は、一向に出なかった。
苛立つ宮代拓留が、結衣や結人に当たるようになったら、どうしよう。そんなことを悩んでいたある日、事件は起こった。医院から聞こえてくる、大きな音。玄関にいた私は、すぐに駆けつける。
宮代拓留が、ベッドから転げ落ちていた。大変だと驚くより先に湧いて出てきたのは、喜びだった。ベッドから転げ落ちた。つまり彼は、寝返りを打ったのだ。
気づけば私は、彼を抱きしめていた。そこに打算はない。ただ、嬉しくて、私は宮代拓留が……拓留が苦しいから、と赤い顔で怒るまで、ずっと抱きしめていた。

私は宮代拓留を支えることで、来栖乃々であろうとすることのプレッシャーから、解き放たれた。先生たちと学食のことでやり合い、生徒会長として先頭に立つ。優しさだけでなく、強さもあった乃々ちゃんのような振る舞いが、自然とできるようになっていた。

拓留が、病院の地下でのことを口にしたのは、そろそろリハビリの卒業が見えてきた頃のことだった。
「そう言えば昔さ、子供の頃、病院の地下に行ったことがあってさ……アレはいま考えると、入っちゃいけない場所だったのかなって」
「ええっ？」
いきなりだったので、声が上擦ってしまった。

なんでもないと言い繕い、拓留に話の続きを促す。

ある病院の地下に潜入して、惨い実験を受けていた女の子を目撃した。でも怖くなって、自分はそのまま逃げ出してしまった。話をボカしてはいるが、拓留の話は、私の記憶と一致する。

やはり拓留は、私があのとき地下で見た少年だったのだ。

この思い出を語る拓留は、とてもつらそうな顔をして、目に涙を浮かべていた。

「なんで助けられなかったんだろうって、いまでもたまに夢に見るんだ」

拓留は、私以上にあのときのことを気に病んでいた。

「拓留。その話、ほかの誰かにしたことはあるの？」

「え？　……こうやって話をしたのは、多分、乃々が初めてだと思う」

「そう……」

青葉医院のベッドに腰かける拓留の横に私も座る。

「きっとその娘は、あなたを恨んでなんかいないわ。だって拓留はいまでも、その娘のことを、覚え続けていてくれてるんだもの」

来栖乃々として、同級生に会う機会は何度もあった。彼らは、南沢泉里のことを忘れて、正確には忘れようとしていた。人によっては、私に彼女のことを忘れるように言ってくるときもある。

でも拓留は、こうして彼女を覚えていて、悔やんでくれている。もしあの日、私が死んでいて。あの世で拓留のこの気持ちを知ったとしたら、きっと嬉しかったと思う。

私は、拓留のおかげで、来栖乃々を続けられた。彼の繊細な優しさに、私は救われたのだ。
そしてその結果、宿っていた感情。私がその思いを自覚したのは、あの屋上での瞬間。すべてを喪ったと思い込んでしまった、あのときだった。

■

――2016年　3月28日――

自分勝手極まりない、ニセ来栖乃々の告白。病室にいる誰もが、頭を抱えていた。
「なんて言ったらいいんでしょうか……あんまりに話が大きすぎて。もしあの夜、南沢泉里の幻覚に追い詰められていた私が聞いたら、怒っているでしょうけど」
「ごめんなさい」
有村さんの怒りは当然だ。さらに私は、彼女の能力に引っかからない言い方を、ずっとしていたのだから。
「いえ。気にしないでください。話が大きすぎる上に、そもそも私はずっと来栖先輩として南沢先輩と付き合ってきたわけで……うーん」
「ない頭を使って悩むのは、一人のときにしておけ」

「そうですねー私の頭にはなんもないですしねー。どこかの誰かさんのように、交換条件で猫耳を装備したりしてないですからねー」
「アレは忘れろと、言ったはずだが。開頭して、問題部分を摘出してやろうか?」
「うわあ、怖！　でも秋葉原に避難したときに撮った、誰かさんの猫耳メイドな写真。思い出として、あの協力者サマから届いたんですよねー。拡散してよかですか?」
「あの男──っ!」
　言い合いを続ける有村さんと久野里さん。
　香月やうきちゃんがオロオロしているが、二人の雰囲気は、随分と変わっていた。少なくとも、研究者と実験対象といった関係には見えない。
「この決着は後でつけるとして。おそらく南沢泉里の話を判断するのは、私たちではない。当事者である、宮代拓留本人だろう」
「……拓留は無事なんですか!?」
　思わず声を荒らげてしまう。よかったと喜ぶ私だったが、周りの顔色は恐ろしく暗かった。
「宮代拓留は、重要参考人……いや。ニュージェネの狂気の再来の犯人として、この病院に収容されている」
　久野里さんが、何を言っているのかわからなかった。
「そんな!　犯人は、世莉架で……」

「乃々さん、実は」
「わかってるわ、うきちゃん。父さ……佐久間亘が共犯だったんでしょう？」
寝ている私が知っているとは思っていなかったのだろう、うきちゃんは、凄く驚いていた。あのとき見た未来の幻視、いまとなっては過去の幻視は、本物だったらしい。
「佐久間亘は死亡。尾上世莉架は……実質的には自由の身だ。とにかく、責任を問える状況でもないし、状態ではない」
「嘘よ……」
ギガロマニアックスの事件が司法に理解されにくいと言っても、なんで拓留がやってもいない罪を背負わされるのか。そんな理不尽な話が、あってたまるものか……！
「拓留さんは、誰かに罪を押し付けられたんじゃないんです。自分が犯人であることを、自ら望んで……」
「なんで⁉」
もはや、問いかけでなく単なる苛立ちだ。みんなの、申し訳ないという顔が、怒りを吐き出し落ち着いた心に突き刺さる。おそらくみんなも、私が寝ている内に、理不尽な結末への怒りを、すでに誰かにぶつけたのだ。
「それはきっと、私たちを救うため……かも」
「南沢先輩。この病室、ベッドが四つありますよね。ついこの間まで、私と華とうきと、この三人はあのベッドで、昏睡状態だったんです」

有村さんとうきちゃんと香月が？　なんでそんなことになったのか。
「簡単にいえば、私たちと南沢先輩と、それだけじゃなくて碧朋学園のみんなを含めての渋谷の大勢の若者が、嘘にまみれて生きていたワケですよ」
さっき、有村さんは私の事情に関して、話が大きすぎると口にしていた。そんな彼女がいま話していることは、私の話以上に大きくてよくわからなかった。
「嘘を理解したのは、お前が最後だ。お前はこの嘘とは別に、怪我で昏睡していたからな」
「いっちゃんキツいところをスルーできて羨ましい！　とは言えないですね。寝ている状態で、治療法が理解できるかどうかは、賭けでしたし。雛絵ちゃん的ネタバレとしてはー、あの、カオスチャイルド症候群。アレ、単なるPTSDなんて、生易しいものじゃなかったんですよ」
明るく振る舞う有村さんの顔に、一瞬だけシワが見えた。注意深く香月とうきちゃんを見てみると、二人も何かやつれているというか、肌だけが若干歳を取っているように見える。
「この嘘を自覚し、渋谷の若者を救ったのは、ほかならぬ宮代拓留だ。これ以上は、当人の口から語ってもらわなければ、納得できないだろう。身体は動くか？　動くのならば、宮代拓留がいる病室に案内しよう」
一刻も早く、お願いします。そう言いたいのに、言葉が出ない。
私が、卑怯者で嘘つきな私が、どんな顔をして拓留の前に出ればいいのか。来栖乃々から、南沢泉里に戻ったことで、優しさも強さも霧散してしまったような。

「宮代拓留という人を、信用できないんですか?」
悩む私にかけられた有村さんの言葉は、刺々しかった。彼女は、怒っていた。
「拓留さんは、乃々さん……姉さんの嘘を赦してくれないような人じゃないです」
「宮代先輩は本当に立ち向かった。だから、先輩にも立ち向かって欲しい。それに宮代先輩は……私の嘘も赦してくれた。だから、お願い……です」
私の嘘を赦してくれたみんなが、初めて怒っていた。
そうだ。私は自らの口で、拓留に告白しなければダメなんだ。もし罪滅ぼしというものがあるなら、それは拓留に面と向かって、話すことだ。
「すみません。久野里さん……案内を、お願いします」
私は、できる限りの力を込めて、改めて久野里さんにお願いした。
「ああ。わかった。宮代拓留も、お前が目を覚ますのをずっと待っていた。だから、それでいいんだ」
久野里さんは、ちょっとだけ呆れた様子で……そして彼女なりに嬉しそうに応えてくれた。

エピローグ

「バカだなあ。もっと早く話してくれればよかったのに」
鉄格子付きの、まるで刑務所みたいな病室で私の告白を聞いた拓留は、本当に気にしていない様子で、笑って許してくれた。
それどころか、ボロボロと泣く私を逆に慰めてさえくれた。
「これじゃあ、どっちが兄で姉なのか、わからないよな」
「私……私が……おねえちゃんなんだからね……」
説得力ないなあと、拓留は言う。
意識を失っているうちに、拓留は別人のような成長を見せていた。拓留も、訥々と私が寝ているうちにあったことや、カオスチャイルド症候群や碧朋学園の真実を語ってくれた。
薄々知ってはいたが、佐久間の正体に関しては、やはり衝撃的だった。同じくらいに、委員会と呼ばれる組織が実在することや、新聞部と生徒会の顧問であった和久井先生、彼の正体にも驚いたが……。
「じゃあ、一つ僕の代わりに、やって欲しいことがあるんだ」

落ち着いたらでいいからと、拓留は私に、一つの頼みごとをした。

■

――２０１６年　７月24日――

宮下公園。いまでも数多くのホームレスが拠点とするこの公園。退院して、リハビリのために病院に通う私は、拓留に言われたとおり、拓留が住まいとしていたトレーラーハウスに向かっていた。

「トレーラーハウス、ほっときっぱなしになっちゃったからね。あそこはいい場所だし。あまり占拠しているのも、良くないだろ？」

トレーラーハウスには、拓留の私物も多く残っている。回収して処分して欲しい、それが拓留の願いだった。もう、いつ帰れるかわからないから……。

久しぶりだったけど、トレーラーハウスは特に変わりなかった。

ニュージェネの再来の主犯、注目や恨みを買う拓留の住んでいた場所。標的になりそうなものだが、トレーラーハウスは綺麗(きれい)なままだ。理由はわかった。この家を、守り続けてくれた人が、いたのだ。

「ぐがーぐおー」

ゲンさんがトレーラーハウスの入り口で寝ていた。

声をかけようとすると、気配に気づいたのかゲンさんが顔を上げた。

「んん？　おう、嬢ちゃんじゃねえか。腹と胸？　刺された傷は治ったかい？」

ふと気づく。ゲンさんと面識があるのは、来栖乃々のときの私であって、いまの南沢泉里に戻った私とは初対面のはずだ。

でもどうした訳かゲンさんは、私が乃々であった人間だとわかっていた。

「……ゲンさん？　私が誰だか、わかるんですか？」

「ああん？　タクのお姉ちゃんやってる嬢ちゃんだろ？　ああ、イメチェンしたんで、わからないって？　ああ世の中、それぐらい普通だぞ？　余のお仲間みたいなのが元天才科学者だったり、未来から娘がやってきてバイトしてたり、人間の身体を捨ててデーターだかなんだかになったり、不思議なことはたくさんあるからな！　頑張れよ、若人！」

まあ、ゲンさんだし。拓留がゲンさんを評していた言葉の意味が、ようやくわかった気がする。諦めつつの納得が大事なのだ。

「ところでよお、タクはいつ帰って来るんだい？　余の友人の居城を守るために、最近はずっとここで寝てるんだ」

「拓留は……その……しばらく……帰って来れないんじゃないかと……」

ゲンさんは、拓留が捕まり、連日話題になっていることを――

「まあ、あんな事件の犯人にされちまったら、しばらくは無理だな！　でも、余は待つぞ！　だいたい、あのときの借りを、まだ返してもらってないからな！　ここで生きていた以上、ホームレス１００の掟は守っ

てもらわねぇと。99はもう評議会に廃案されたけどな！」
　知っていた。
「余の見込んだ友人が、帰って来ないはずはない！　余としては、友人が帰って来るまで、この領土を防衛せねばならない！　おいタクよお、早く帰って来ねえと、ツケが返せなくなるぞ!?」
　知ったうえで、友人の帰還を信じている。なんだか、この酔っ払ったホームレスのおじさんが、頼もしくて思えて仕方なかった。
「ゲンさん。拓留が帰って来るまで、このトレーラーハウスを管理してもらってもいいですか？」
「おう！　任せておけ！　ここの入り口に引っ越してくらあ！　中に入っちまったら、マズいからな。ここぁ、タクの家だ」
　ゲンさんは、自分の胸をドンと叩いて、ゲホゲホとむせた。
「ありがとうございます。それじゃあ」
「ん？　嬢ちゃんは何しに来たんだ？　この家に、用があるんじゃなかったのか？」
「ああ。いいんです。やっぱり拓留にやってもらうんで」
　家に恥ずかしいものがあるから、片付けは泉里だけでやって欲しい。ほかの人は、特に有村辺りなんかは絶対に巻き込まないでくれ。悲痛感で誤魔化(ごまか)されていたが、やはりこういうのは、自分でやったほうがいい。信頼してくれているのはうれしいけど、私だって、恥ずかしいものを見つけてしまったら、やっぱり気まずい。

なんだかちょっとスッキリして、私はゲンさんと別れる。もう少し、開き直らないと、拓留を逆に心配させてしまう。姉としてそれは、少し情けない。
拓留の姉。私は、きっとそれでいいのだ。だって、あの子が好きなのは、別の子なんだから。

碧朋学園の屋上で、世莉架に刺される前に観た、最後の幻視。
たぶん、ヒカリヲの一件よりもちょっと先。私が寝ている間の出来事で、拓留が渋谷のみんなを救ったことに、繋がる話。
モニターばかりの不気味な部屋で、おぞましいディソードを持った和久井に拓留は追い詰められていた。
拓留と一緒にいる世莉架は、ディソードを振るっていた彼女とはまるで別人みたいだった。無抵抗なまま、和久井の能力に、傷めつけられている。
「予想以上に硬いな、彼女は。これだけのことをできる力があったっていうのに、キミはどうして——」
世莉架を、〝元通り〟にしようとして上手くいかなかった和久井先生がボヤく。
「それが——僕が〝あいつ〟にできる、唯一の償いだから」
拓留の言う〝あいつ〟。拓留はすぐ近くにいるその娘の名前を、呼ばなかった。
「僕たちは、一緒にいたら何も変わることができない。離れたからこそ、僕もあいつも、もう間違えない。そうじゃないと、また繰り返してしまう」

「繰り返せばいいじゃないか。それのどこが悪い？」
コンティニューすればいいじゃないか。君にも僕みたいにそれができる能力があっただろう？
能力者らしい傲慢さを見せつける和久井。だが拓留が屈することはなかった。
「男が……好きな子にすがりついて生きてくなんて、できるわけないだろ」
拓留は、手にしていた絶対的な能力を拒絶し、ハッキリと男の子らしい意地を、貫いてみせた。

「フラれちゃったな、私」
誰も聞いていないのを確認し、ポツリと呟く。拓留の隣にいる彼女が私でも、いいかななんて、密かに思ってたのに。でも、拓留が選んだのは、義姉ではなく友達だった。とりあえず、今のところは、吹っ切れている。今後はどうなるかわからないけど。
僕の最後の能力で、記憶を改ざんされ、本当の普通の女の子になった世莉架とまた出会ったら……そのときはまた友達になってくれ。拓留はそんなことも私たちに願っていた。
普通の女の子になった世莉架と、元の姿に戻った私。本当の親友になれる日も、あるのかもしれない。
宮下公園を出て、渋谷の中心街を歩く。渋谷の街からは、嘘も狂気も綺麗サッパリ消え去っていた。時間もあるし、乃々ちゃんにいろいろあったことを話そう。慰霊碑に足を向ける寸前に、乃々ちゃんの遺骨は、もう慰霊碑にないことを思い出す。

南沢泉里として葬（ほうむ）られていた乃々ちゃんの骨は、密かに来栖家のお墓に移されていた。だからもう、あそこに乃々ちゃんはいないし、南沢泉里もいない。

今日の天気は晴れ、空は真っ青で晴天。

夢の空、もう一つの空、昏（くら）い空、深い空、空の上で。

空に関する、さまざまな表現が出てくる。

でもこの空は、渋谷を包む虚言が晴れた空なんだから、本当の空と呼びたい。

「ごめんね、乃々ちゃん……」

私は、本当の空めがけ、そこにいてほしい乃々ちゃんに話しかける。

「これからたくさんつらいこと、哀しいこともあるかもしれないけど……それでも私は、もう逃げたりなんてせず、立ち向かっていこうと思う……南沢泉理として……」

乃々ちゃんを、いいように利用してしまったことへの罪悪感は、まだある。おそらくこれは、私がずっと背負い続けるべき罪だ。でも私は、南沢泉里として生き続けることを、選んだ。

「それが私にできる、あなたへの手向（たむ）けだと思うから――」

空に吸い込まれる言葉。

『がんばって、泉理ちゃん……』

ただの聞き違えかもしれない、都合のいい幻聴かもしれない。でも私には、間違いなく乃々ちゃんの懐かしい声が、聞こえていた。

「うんっ、うん……ありがとう、乃々ちゃん……」

涙ぐみ、私は親友にお礼を言う。心からのお祈りも、青い空に吸い込まれていく。

特別となってしまった拓留が作った、本当の静かな空。どこまでも、いつまでも見上げていたかった――

（了）

藤井三打（ふじいさんだ）

特撮やゲームに浸り、プロレスを愛しているうちに、アメコミ関係の仕事を手伝うようになり、最終的にライトノベル作家としてデビューを果たすという、よくわからない経歴の人物。我ながら、ひどく怪しい。

主な燃料は、ハイボールやビール。アルコール万歳！

イラスト／ささきむつみ

本作「CHAOS;CHILD」の公式キャラクターデザイナー。北海道出身。多くのキャラクターデザインを手がける。代表作に「HAPPY☆LESSON」「双恋」「CHAOS;HEAD」など。

電撃文庫

妄想科学(もうそうかがく)ADV(アドベンチャー)
CHAOS;CHILD(カオスチャイルド)
とある情弱(じょうじゃく)の記録(きろく)

藤井三打(ふじいさんだ)

発　行　2015年12月10日

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8266（編集）
http://asciimw.jp/

※2015年12月10日発行の電撃文庫『妄想科学ADV CHAOS;CHILD　とある情弱の記録』初版に基づき制作